

庫文民公

白隱
禪師
遠羅天釜

216

800

社會式株版出同共

特65
285

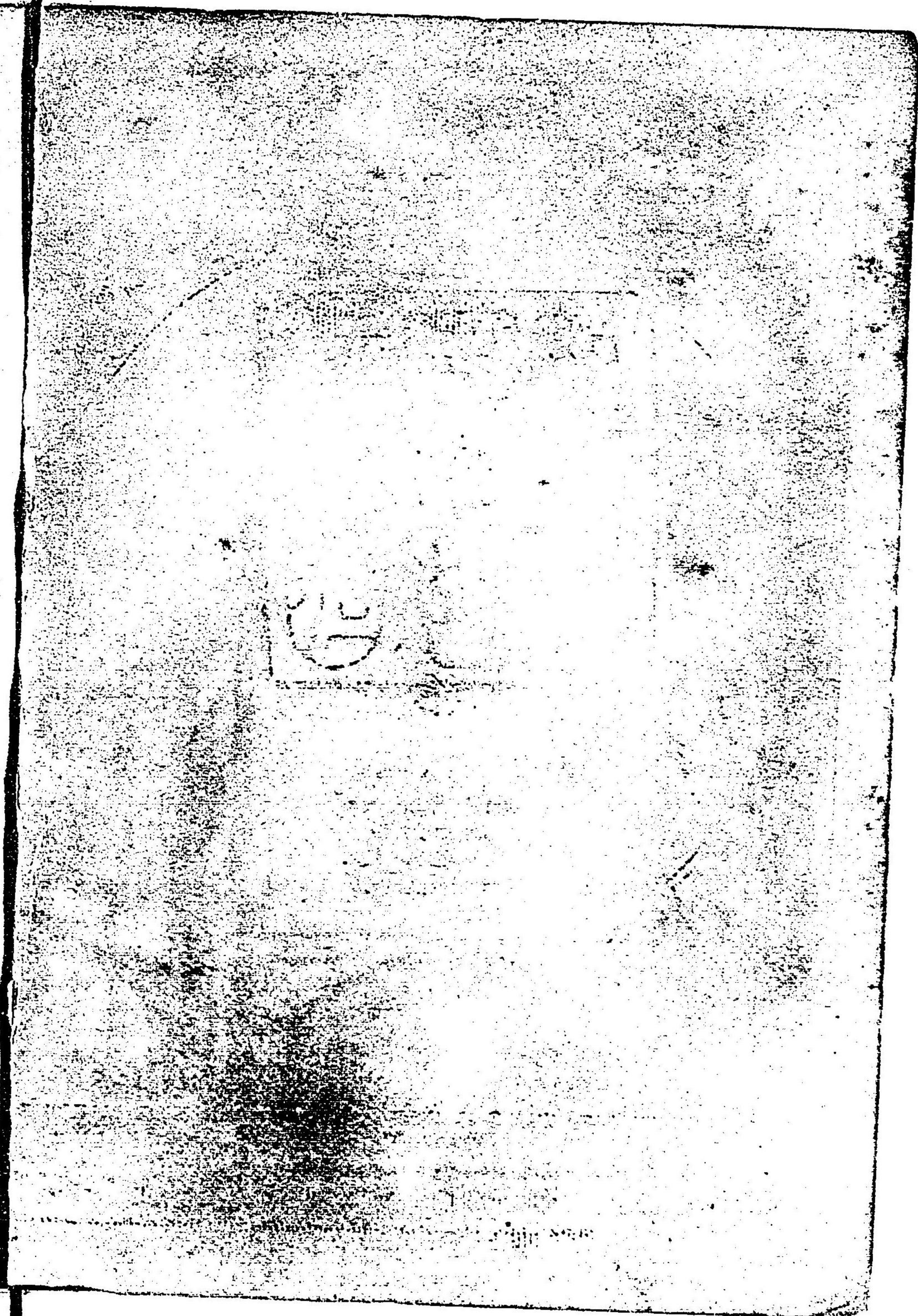
Public Library
No. 11

白隱
禪師

遠
羅
天
釜

明治

共同出版株式會社
內賣



白隱禪師傳

(續日本高僧傳所載)

釋慧鶴字白隱俗姓杉山氏駿河浮島原人也
 天資英敏早露頭角七歲遊精舍聽僧講法華
 提婆品還爲二親覆講焉十一歲聽一僧說地
 獄變相寒毛卓豎願脫獄苦恆誦普門品大悲
 咒等學年從單嶺和尚得度自誓曰若不獲肉
 身而火不能燒水不能漂底道力設死不休誦
 經作禮無有懈怠不幾游方抵濃州瑞雲從事
 馬翁夏月曬書積堆架上鶴進拜默禱曰儒佛

老莊諸家之道，我以何為師，護法天龍願示我
 正路，瞑目任手把著，得禪關策進，於是生決定
 心，常以此書為日新之銘，或宿播州山寺，見溪
 流，感曰：山下有流水，滾々無止時，禪心若如是，
 見性豈其遲，寶永五年，抵越後英巖寺，聞性徹
 和尚講，人天眼目，鶴辨道尖進，夜坐乍聞鐘聲，
 豁然省發，高聲叫云：阿呵呵，巖頭和尚，萬福現
 在，徑走見性徹，呈所見，徹機鋒鈍矣，乃與一掌
 而出，鶴自思：三百年來，未有如予痛快者，時宗
 格禪人在會，邀鶴，遣參其師，正受老人，夏四月，

伴，抵信州飯山，正受庵，謁慧端禪師，便呈一偈，
 端左手握偈曰：這箇是汝學得底，展右手曰：那
 箇是見得底，鶴曰：若有見得底，可呈，須吐卻，乃
 作嘔吐聲，端拶曰：趙州無字，作麼生會，鶴曰：趙
 州無向何處，著手脚，端以指抑鼻頭曰：嗟多少
 著手脚了，鶴於此通身汗流，慢幢倒了也，端大
 笑曰：箇鬼窟裏死禪和子，鶴無語，端曰：汝恁麼
 為足歟，鶴曰：有何不足處，端舉南泉遷化話，鶴
 掩耳出，端曰：闍黎，鶴回首，端曰：箇鬼窟裏死禪
 和子，自此僅見跨門，便怒罵，於是親參南泉遷

化話工夫十倍平常一日分衛立門老婆曰過別處去鶴恍然立婆怒拈竹帚曰何故踟躕便打鶴釋然大悟方領難透因緣活用自在還來未跨門闥端見喜曰汝徹矣夏五月端說無相心地戒授焉鶴聞真訣泣淚頂受而退矣冬十一月辭歸于松蔭時年二十四歲結冬安居動靜二境辨道勇進比來勞參學心火逆上肺金焦枯現十二種凶相曰頭腦暖如火曰腰脚冷如冰等也於是尋訪國手求治或云城洲白河山中有白幽真人精醫通仙鶴聞大喜直抵白

河躋山數里徐詣巖窟頓首云某久罹沈痾願先生出祕收之手救我患幽辭曰予非醫非仙只因病逃世而已自愧勞上人遠來鶴懇請不休幽恬然捉手察九候復窺五內攢頰曰已矣哉觀理過度終致此重症勤而不積內觀之功則不能起焉鶴曰願聽內觀之要幽肅然乃授內觀修養秘訣鶴聞仙訣戀戀而辭還松蔭專一修鍊未幾病愈精神爽利也正德三年掛錫泉州蔭涼見壽鶴道人究洞上宗旨去隱美濃巖瀧山岩棲谷飲二更寒暑享保二年住持

遠 羅 天 釜

松蔭翌年冬十一月轉位於花園第一座嗣法
干透鱗除夜小參曰今歲今宵去明年明日來
家家著新樣衣戶戶期春神到瓶挾帶根松盤
堆加葉橘正與麼時莫卻有不涉新舊底寶所
麼曰在作麼生是不涉新舊底寶所氣霽風梳
新柳髮冰消波洗舊苔鬢以何爲驗卓拄杖一
下曰丘之禱久矣佛生日偈云魂飛魄散鐵船
碎此是吾家佛誕生兄弟二三四五六曉雲壓
翠雨中楨自住松蔭十年甘枯淡喫艱辛專一
辨道日暮自坐破轎中令村童以蒲團被甲以

遠 羅 天 釜

繩結束兀然達旦明朝諸童來而解放之每夜
如此晝閱佛祖言教不放左右享保十一年秋
七月讀法華經至譬喻品忽聞蒼鳴古砌聲聲
相連豁然契當法華深理初徹見正受老人平
生受用自此不疑佛祖言教爾來道聲大震四
部依賴因講臨濟錄碧巖集等鍛鍊參徒元文
五年提唱虛堂錄滿堂四百餘人累年應請四
方提唱佛經祖錄衆恒不減二三百員學者虛
往實歸叢林之盛冠千一時寶曆八年輪下緇
素創龍澤爲開山祖明和元年講大應錄清衆

遠 羅 天 釜

七百餘員、列于坐下、五年冬十二月、在松蔭、示
 微恙、十日召遂翁、委囑後事、十一日曉旦、安眠
 高臥、大叫一聲而逝矣、闍維得舍利羅、無算、保
 命八十四、坐夏六十九、嗣法東嶺遂翁若干人、
 所著荆叢毒藥、夜船閑話等、數十部行于世矣、
 翌年夏六月、勅謚神機獨妙禪師也、
 贊曰、鶴公機鋒峻捷、難近傍、潛行密修、不能窺、
 然而大慈應物、忘疲勞、一時宗匠、多出松蔭、可
 謂問世偉人也、

遠 羅 天 釜

遠羅天釜師平日所用茶銚也、不知爲何義而、
 取以名此書矣、此書師與門徒往復簡語而其、
 草稿僉不經信宿而成也、想暗記之失必多焉、
 大方學者識有茶味而存焉、何以事故爲哉、辛
 未春余之播與楠田某邂逅、謂余曰、子向雖編、
 鷓林老師遠羅天釜恨闕念佛一書、子若補之、
 願捨小財以助梓費、今秋京師書肆田原吉田、
 二氏詣余乞一新遠羅天釜舊板、不正余便可、
 之乃得副此一本、且與豐琅二道友筆之校之、
 又區畫之以授之云、

序

二

寬永仲秋吉日

慧梁謹識

遠 羅 天 釜

遠羅天釜

目次

- 答鍋島攝州侯近侍書……………一
- 贈于遠方之病僧書……………九
- 答于法華宗老尼之問書……………八一
- 漢文無題(法華真面目)……………一三三
- 答念佛與公案優劣如何之問書……………一三九
- 答客難……………一六五

遠 羅 天 釜

目次

一

白隱禪師遠羅天釜

卷之上

答鍋島攝州侯近侍書

日の昨は遠路御使札益御勇健にて朝鮮人御馳走首尾よ
 く相濟御安堵の旨一段の御事に候草慮恙なく罷在候是
 又高慮を勞せられ間敷候且又動靜二境の上に於て御工
 夫怠慢なく御心掛なされ候條珍重の御事に候其外に書
 中に仰越れ候件々逐一老僧が野情に相契ひ御奇特千萬
 の御事如何許り悦び入り候總じて一切の修行者精進工
 夫の間に於て心掛悪く侍れば動靜の二境に障られ昏散
 の二邊に隔られ心火逆上し肺金痛み悴げ元氣虚損して

遊羅天釜

難治の病症を發するも間々多き事に侍り又内觀の眞修に依て能々修鍊致し侍れば至極養生の秘訣に契つて心身堅剛に氣力丈夫にして萬事輕快に法成就にも到る事に候去程に大覺調御も阿含部に於て右の趣を委く教諭此あり天台の智者大師も其大意を汲で摩訶止觀の中に丁寧ていねいに示置れ侍り書中の大意は縦たてひ何分の聖教を披覽し何分の法理を觀察し或ひは長坐不臥し或ひは六時行道すと云へども常に心氣をして臍輪氣海丹田腰脚の間に充しめ塵務繁絮の間賓客揖讓の席に於ても片時も放退せざる時は元氣自然に丹田の間に充實して臍下瓠然たる事未だ篠打せざる鞠の如し若人養ひ得て斯の如くなる時は終日坐して曾て飽す終日誦じて曾て倦す終日書

遊羅天釜

して曾て困せず終日説て曾て屈せず縦ひ日々に萬善を行すと云へども終に退惰の色なく心量次第に寛大にして氣力常に勇壯なり苦熱煩暑の夏の日も扇せず汗せず玄冬素雪の冬の夜も襪せず爐せず世壽百歳を閱すと云へども齒牙轉堅剛なり怠らざれば長壽を得若それ果して斯の如くならば何れの道か成せざる何れの戒か持たざる何れの定か修せざらん何れの徳か充ざらん若又如上の故實に達せず眞修の秘訣を諳んせず妄りに自ら悟解了知を求めて觀理度に過ぎ思念節を失する時は胸膈否塞し心火高ふり上り兩脚氷雪の底に浸すが如く雙耳溪聲の間を行くに齊ふして肺金痛み悴け水分枯渴して終に難治の重症を發して命根も亦保ち難きに至る是た

遠 羅 天 釜

い眞修の正路を知らざる故なり寔に悲しむべし蓋し摩訶止觀の中に假縁止諦眞止と申す事の侍り只今申し談ずる内觀の法とはかの假縁止の大略にて侍り老夫も若かりし時工夫趣向悪く心源湛寂の處を佛道なりと相心得動中を嫌ひ靜處を好んで常に陰僻の處を尋ねて死坐す假初の塵事にも胸塞り心火逆上し動中には一向に入る事得ず舉措驚悲多く心身鎮へに怯弱にして兩腋常に汗を生じ雙眼斷へす涙を帶常に悲歎の心多く學道得力の覺へは毛頭も侍らざりき何の幸ぞや中頃よき知識の指南を受て内觀の秘訣を傳受し密々に精修する者三年從前難治の重病はいつしか霜雪の朝曦に向ふが如く次第に消融し宿昔齒牙を挾む事得ざる底の難信難透難解難

遠 羅 天 釜

入底の惡毒の話頭は病ひに和して氷消し今歲從心の齡を經と云へとも三四十歳の時より氣力十倍し心身ともに勇壯にして脇席を濕さず恣に偃臥せざる者動もすれば二三七日を経る事間此あれども心力衰減せず三百五百の燕頷虎頭に圍遶せられて經論を講演し語録を評唱して三旬五旬を経れども曾て疲倦の色なき者は自ら覺ふ此の内觀の力による事を初め養生を第一とし内觀工夫の間求めざるに不慮の省悟得力幾度と云ふ數を知らず只動靜の二境を嫌はず取す密々に進修しもて行事第一の行持に侍り往々に靜中の工夫は思の外に墓行様に思はれ動中の工夫は一向に墓行の様に覺へらるゝ事に侍れど靜中の人は必ず動中には入る事得ずたまゝ動境

遼 羅 天 釜

塵務の中に入時は平生の會處得力は迹形もなく打失し
 一點の氣力無して結句尋常一向に心がけこれ無人よりは
 劣りて芥許りの事にも動轉して思ひの外に癡病なる
 心地あつて卑怯の働きも間多き者に侍り然らば則ち何
 を指てか得力と云んや去程に大慧禪師も動中の工夫は
 靜中に勝る事百千億倍すと申し置かれ侍り博山は動中
 の工夫成し上らざる事一百二十斤の重擔を荷つて羊額
 嶺頭のほに上るか如しと申されき蓋かく云へばとて靜中を
 捨嫌つて故意に動處を求め玉へと云にはあらず只動靜
 の二境を覺へず知らぬ程工夫純一なるを貴とす所以に
 言ふ眞正參禪の衲子は行て行事を知らず坐して坐する
 事を知らずと中に就きて眞實自性の淵源に徹底して一

遼 羅 天 釜

切處に於て受用する底の氣力を得んとならば動中の工
 夫に越たる事は侍るべからず譬ば茲に何百兩の黄金あ
 らんを人をして守護せしめんに室を閉扉を鎖して其傍
 らに坐し守て人にも取られず奪れずとて中々氣力有ん
 ずる者の手柄も働きとも申さるべき事にし非ず是を
 二乘聲聞の自了偏枯の修行に比す又一人有り群盜蜂の
 如くに起り凶黨蟻の如くに馳廻らんず中をかの金を持
 して何某の處まで贈り届けよと命せられたらんに彼男
 膽氣あつて大劔を挟み脛高く褰げかの金を取て棒頭に
 突掛け打傾て一交もせで彼所へ贈り届けて少しも恐る
 ゝ氣色なくんば天晴甲斐くしき働らき大丈夫の氣象
 とも稱嘆すべき事なりこれを圓頓菩薩の上求菩提下化

遠羅天釜

衆生の眞修に比す何百兩の黄金とは正念工夫堅固不退の大志を云へり群盜蜂の如く凶黨蟻の如しとは五蓋十纏五欲八邪の妄念を云へり彼男とは眞正參禪圓頓究竟の上士を云へり何某の處とは常樂我淨の四徳具足大寂彼岸の寶所を云へり所以に言ふ眞正參玄の衲子聲色堆裏に向つて坐臥すべしと往々に古の二乘聲聞なりとて輕しむれども見道の力も智徳の光りも今の世の人々の及ぶべき事にし侍らず只修行の趣向あしく空閑の處をのみ好みて都て菩薩の威儀を知らず佛國土の因縁なき故に如來は疥癩野干の身に比し淨名は焦芽敗種の部類なりと呵責し玉ひき三祖大師の宣はく欲趣一乘勿惡六塵とは是又六塵を數奇好めどもには非ず水鳥の水に入ども

遠羅天釜

少しも翼の濕ざる如く平生六塵の上に於て取らず捨てずして間斷なく正念工夫相續せよとの心にて侍り若又一向に六塵を避八風を恐れば覺へず二乗の白窠に墮して永く佛道を成せじとなり永嘉大師は在欲行禪知見力火裏生蓮終不壞と宣ひき是亦五欲に耽着せよとの心には侍ず五欲六塵の上へに在ても蓮の泥土に汚されざるが如く純一に受用せよとの心にて侍り然るに山林野外に在て一食卯齋し六時行道する人さへ道業純一になる事能はず况や夫婦昆弟の間に交り塵務紛然たる巷をや若それ見性の眼なくんば毫釐も相應する事能はじ是故に達磨大師云く若欲覓佛須是見性と若し又た忽ち諸法實相唯一乘の知見を開かば六塵即ち禪定五欲即ち一

遠 羅 天 釜

乘なるが故に語黙動靜常に禪定中なるべし若果して然らば彼山林に在て禪を行ずる底と得力霄壤の間を隔てん火裏の蓮とは世間希有の行者なりと稱歎し玉ふに非ず永嘉は天台の三諦即一の堂奥に達し止觀の修行は精しく鍛鍊し玉ひたれば傳中にも四威儀に常に禪觀に冥すと稱歎したる程なれば片言隻字といへども中々容易の事にし非ず四威儀に常に禪觀に冥すとは四儀即ち禪觀禪觀即ち四儀なるに冥合したる境界を云へり彼菩薩は道場を起すして諸の威儀を現すと説たまひしと同模範なりそれ蓮は水中にさける華なる故に火邊に近付時は立處に枯れ凋む事なり然れば火氣は蓮には上へもなき敵藥ならずや然るに火裏よりさき出たらん蓮は

遠 羅 天 釜

烈火に向ふ程いよく色香を増して麗はしかるべし彼五欲を避嫌つて最初より修行したらん人は縦ひ我法の二空に通じ見道如何許り明らかなりとも靜中を離し動中に向ふ時は蜺蝦の水を失へるに等しく獼猴の林樹を離れたるに似て半點の氣力無して左ながら水中の蓮の火氣に逢て忽ち凋枯するが如けん若し又平生六塵の上へに於て猛く精彩を著け純一無雜打成一片にして毫釐も錯らず彼何百兩の黄金を亂世の時贈り届けし人の如く猛く甲斐くしき氣象を押立て片時も間斷なく勵に進みたらんには忽ち自心の源底を掀翻し生死の命根を踏斷して虚空消殞し鐵山摧る底の大歡喜あらん彼火裏よりさき出たる蓮華の火氣に逢てうたゝ色香を増が

遠 羅 天 釜

如けん何が故ぞ火氣即ち蓮華蓮華即ち火氣なる故に只返々も内觀の眞修寔に放過すべからざる至要なり内觀の眞修とは吾此臍輪以下丹田氣海及び腰脚足心總に是趙州の無字無字何の道理かある吾この臍輪以下丹田氣海及び腰脚足心總に是自己本來の面目面目の鼻孔何の處にかある吾此臍輪以下丹田氣海及び腰脚足心總に是吾唯心の淨土淨土何の莊嚴かある吾此臍輪以下丹田氣海及び腰脚足心總に是吾己身の彌陀彌陀何の法をか説吾此臍輪以下丹田氣海及び腰脚足心總に是吾本分の家郷家郷何の消息かあると咳唾掉臂寤時寐時男子たる者の思ひ立たる事を遂すや置べき仕果すやあるべきと決烈勇猛の大憤志を震つて間もなく進み給はゞ平生の心意

遠 羅 天 釜

識情すべて行れず胸襟分外に清涼に分外に皎潔にして萬里の層氷裏にあるが如く縦ひ亂軍の場に入り歌舞遊宴の歌吹海に入るといへども人なき處に在が如く雲門大師の氣宇王の如しと道底の大機は求めざるに煥發せん此時に當つて諸佛衆生も是幻生死涅槃猶如昨夢天堂地獄を徹見し佛界魔宮を銷融し佛祖の正眼を瞎却し恣に百千無量の法門微塵恒沙の妙義を説き宣一切の含識を利益し塵沙劫を経て退屈せず永劫大法施を行じて曾て乏しき事なく空華の萬行を展開し谷響の度門を建立し臂に奪命の神符を掛け口に法窟の爪牙を咬鳴して十方參玄の衲子を惱害し釘を抜き楔を奪て毫釐も假事なく一箇半箇牙劍樹の如く口血盆に似たる底の凶惡無

遠羅天釜

義の鈍暗漢を打出して以て佛祖の深恩を報答す是を佛
 國土の因縁菩薩の威儀と云ふ是はこれ萬夫に傑出する
 底の大丈夫兒生平の懷素なり彼寂靜無事の處に在つて
 識神を認得して見性なりと相心得揩磨淨盡して以て足
 れりとする底の無眼禿奴の族は夢にも曾て見る事を得
 んや是等の族は終日無爲を行じて終日有爲を打し終日
 無作を行じて終日有作を打す何が故ぞ見道分明ならず
 親しく法性の實際を窮めざる故に惜むべし再び得難き
 一生を盲龜の空谷に入が如く鬼の棺木を守るに似てや
 みくくと過了て苦しかりし三塗の舊里へ懲もなく立歸
 らん事皆是進修の指南惡しく見性本より真ならざるが
 故に一生空しく心力を勞し盡して終に方寸の功を立る

遠羅天釜

事能はず寔に憐むべし去る程に時宗一遍上人の如きは
 鉦子を頸に打掛け念佛しながら一度三塗に入ぬれば再
 びかへる事ぞなきと打泣く東は奥州出羽の果西は築
 紫博多の浦の奥までも告廻り給ひけるが終に由良の開
 祖に見て往生の大事を決定し給ひけるこそ寔に貴き芳
 躡ならずやつらく人界の始終を思ふに天上に生ずべ
 きには福力足らず三塗に墮すべきには罪業足らず終に
 此娑婆穢土の生を感得すその中國王大臣長者居士等の
 人々は前生多少の善縁を修し許多の勝因を種來れども
 天上へ生ずべきには福力足らずして今大饒富貴の家に
 生れて臣妾を前後に従へ寶財を左右に束て何の辨もな
 く萬民を憐まず士庶をも惠まず驕奢の心のみ多くて今

遠 羅 天 釜

日も悪業惡因明日も亦殺業苦種多少の福德を擔ひ來て徒に空華の榮耀をのみ極めて限りもなき罪業に仕かへて擔もて果しもなき惡趣の巷へ立歸り玉ふは世間に限りもなき事に侍り只返すくも内觀の秘要を捨をかす熟鍊是あるべし内觀の眞修は第一養生の秘術にして仙人鍊丹の大事に契へりその初めは金仙氏に起つて中頃天台の智者に至つて摩訶止觀の中に精しく口授し玉へり吾壯年の頃をひ是を道士白幽先生に聞けり白幽は城州白川の巖窟に隠れて聞壽齡二百四十歳を閱すと時の人是を稱して白幽仙人と云故の丈山氏の師範なりと幽が言に曰く大凡の生を養ふの術上部は常に清涼ならん事を要し下部は常に温暖ならん事を要す須らく知るべ

遠 羅 天 釜

し元氣をして下に充しむるは是生を養ふ至要なる事を往々に神丹は五行合せて鍊と云事をのみ聞て水火木金土の五行は即ち眼耳鼻舌身の五根なる事を知らず五根を聚て神丹を鍊とは如何なる事ぞとならば蓋し五無漏の法あり眼妄りに見ず耳妄りに聞かず舌妄りに言ず身妄りに觸ず意妄りに思慮せざる時は混然たる本元の一氣湛然として目前に充是即ち彼孟軻氏の謂ゆる浩然の一氣なり是を引て臍輪氣海丹田の間に收て歲月を重ね是を守つて守一にし去り是を養つて無適にし去時覺へず丹竈を掀翻して内外中間八絃四維總に是一枚の大還丹自己即ち是天地に先つて生せず虚空に後れて死せざる底の長生久視の大神仙なる事を覺得せん茲に於て大

遠 羅 天 釜

洋を攪て酥酪となし厚土を變じて黄金とす是故に言ふ
 還丹の一粒點鐵成金と白玉蟾曰養生之要先不若鍊形鍊
 形之妙在乎凝神凝則氣聚氣聚則丹成丹成則形固形固
 則神全と須らく知るべし丹は果して外物に非る事を蓋
 し地に玉田あり梁田あり玉田は珠玉を産するの地梁田
 は禾稼を成ずるの場人に氣海丹田あり氣海は元氣を收
 養ふの寶所丹田は神丹を精鍊し壽算を保護するの城府
 なり古云江海所以能爲百谷王者以其善下之と滄海既に
 萬水の下を占て百川を包容して増減なし氣海既に五内
 の下に居して真氣を收めて飽事なし終に神丹を成就し
 仙都に入る丹田なる者一身三處吾謂ゆる丹田は下丹田
 なる者なり氣海丹田各々臍下に居す一實にして二名あ

遠 羅 天 釜

るが如し丹田は臍下二寸氣海は寸半真氣常に此内に充
 實して身心常に平坦なる時は世壽百歳を閱すと云とも
 鬚髮枯す齒牙動かす眼力うたへ鮮明にして皮膚次第に
 光澤あり是即ち元氣を養ひ得て神丹成熟したる効驗な
 り壽算限り有べからず但し修養の功の精麤如何に在ら
 くののみ古への神醫は未だ病ざる先を治すよく人をして
 心を攝め氣を養はしむ庸醫は是に反す已に病の後を見
 て針灸藥の三つを以てこれを治せんとす救ざるもの多
 し大凡精氣神の三つの物は一身の柱礎なり至人は氣を
 惜んで使はず蓋し生を養ふの術は國を守が如し神は君の
 如く精は臣の如く氣は民の如し夫その民を愛するは其
 國を全ふするゆゑなり其氣を惜むは其身を全ふする

遼 羅 天 釜

ゆるんなり民散ずる時は國亡ぶ氣竭る時は身死す此故に聖主は常に心を下に専にし庸主は常に心を上に恣にす上に恣にする時は九卿寵を好み百僚權に傲つて曾て民間の窮枯を顧る事なし歛臣貪り掠め酷吏偽はり剝野に菜色多く國に餓孁倒る賢良潛み竄れ臣民瞋り恨み終に民庶を塗炭にし國脈永く斷るに至る心を下に専にする時は常に民間の勞疲を忘るゝ事なく民肥國強く令に違するの臣民なく境を侵すの敵國なし人身も亦然り至人は常に心氣をして下に充しむ此故に七凶内に動く事なく四邪外より侵す事能はず營衛充ち心神健かなり身終に針灸の痛痒を知らざる事強國の民の刁斗の聲を聞かざるが如し岐伯昔し黃帝の問に答ふ恬淡虛無なれば真

遼 羅 天 釜

氣これに従ふ精神内に守らば病安よりか來らんと今の人此に反す生より死に至るまで主心片時も内を守る事なし主心とは何それの物と云事をさへ知らず無知なる事犬馬の日々に足に任せて走るが如し危かな兵家に云はずや驚悲妄りに起るは主心定まらざる故なりと蓋し主心内に守る時は憂悲恐怖妄りに生ずる事なし若人片時も主心なき時は死人に如同す或ひは放肆邪侈至らずと云事なし譬へば茲に一箇の舊宅有んに衰朽疲困凍餒貧窶の老女たりと云へども主の有んずる家へはゆへ無して他の人妄りに出入する事叶はず其家もし主人を失する時は賊盜も潛み休ひ乞兒も亦來り宿し狐兔競ひ走り狸貉竄れ睡る閑神晝さけび野鬼夜吟す千妖百怪群

遠 羅 天 釜

邪の窟宅くつたくとならん人身も亦然り正念工夫の主心臍輪氣海の間あひたに盤石ばんじやくなごを洵居しゆいたるが如く凜然として主張する時は一點の妄念情量なく半點の思想卜度なふして天地一指萬物一馬かうま厚重山かうぢゆうやまの如く寛大海の如くなる底の一員の大丈夫佛祖も手を挟む事能はず魔外まけも窺ひ知る事得ず日々に萬善を行じて以て倦事うづなし謂つべし真正報恩底の佛子なりと其人忽ち邪境に奪うばはれ妄縁に引ひかれて覺へず正念工夫の主心を打失す是を忽然念起名爲無明と云い煩惱はんのうの邪魔蜂はちの如くに起り邪見の妖魅いやくみ蟻あひの如くに競つて四大夢幻の廢舍はいしゃ五蘊空華ごんくうけの朽宅きうたく忽ち化して魔魅まみの住處となんぬ千態せんたい萬狀ばんじやく日々に幾萬種の生死しんじぞや外面は高蹈かうたうたる君子の風標あれども内心は夜叉やしゃの變態へんたい多き

遠 羅 天 釜

が如し心こころ上うへは鎮しんへに八島やしまの合戦より苦しく胸中きゆうちゆうは常に九國の兵亂へいらんよりも煩わづらはし恰あたかも長者火宅ちやうぢやうかたくの譬ひへに等ひし是を生な死し常じやう没めつの業海ごうかいと云い若わ夫そ正念工夫しんねんこふうの船筏せんぱつ精進しやうじん勇猛ゆうめうの櫓帆ろはんなくんば識浪情波しきりやうじやうなみの急流きゅうりゆうにおし浸ひたされて臭烟しうえん毒霧どくきの暗區あんくを越得こえて四徳の彼岸ひがんに到る事を得んや悲哉かなしひかた人々如來の智慧徳相しちゑとくさうを具足して少しも缺事かきなく箇々佛性の如意寶珠にぎやうほうしゆを圓備し鎮しんへに大光明を放はなつて娑婆しあは即寂光じやくかうの淨刹じやうせつ毘盧ひる法性ほふせうの眞土しんちに住みながら慧眼えげんすでに盲めくらたる故に婆娑しあはなりと見錯みあやり衆生しゆじやうなりと思ひ違ちがへて得難とくがたき人身逢艱あうげんき一生を闇やみ々と牛馬うまなどの無智昏愚むちこんぐなる如く何の辨わへもなく明あかし暮くらして苦くるしかりし三塗さんだう悲かなしかりし六趣りくしゆの巷ちやうを吟うたひ遠とほりて少しも變遷へんせんあらざる舍那しゃな常寂じやうじやくの眞土

遠 羅 天 釜

を把へて地獄なりと恐れ迷ひ無間なりと泣き苦しむ是
 只よの常とるにも足らぬ斷無の小見に傲り片腹痛き少
 許の口耳の學解に傲て佛法を信せず正法を聞かず虚口
 をのみ利て正念工夫の主心を片時も守る事なき人々の
 なれの果なり悲みても尙悲むべきは流轉永劫の罪累恐
 れても尙恐るべきは生死長夜の苦果なり天下の三聖人
 なりと崇られさせ給ふ延喜天曆の帝さへ焦熱の猛火に
 黒ませ給ふを笙が岩屋の日藏上人はまのあたりに見上
 りたりしに我は粟散小國の王たる事を恃驕慢甚だしか
 りし罪にて斯は成たるぞと宣けるとぞ敏行の朝臣は和
 漢の才に長じ手迹麗しくをはして法華經二百部まで書
 寫し給ひたれども正念工夫をわさざりければ苦趣に墮

遠 羅 天 釜

して紀の友則の許に來りて救ひを乞給ひけるとぞ又本
 朝無雙の名將也と稱せられ給ひて目に餘りたる朝敵を
 從へ至尊の宸襟を休め奉り南都北京の貴僧高僧も加持
 しあぐみたりける天子の御惱を弓のすびきして絃音に
 て搔拭ひたる如く治し上りたる程の八幡殿さへ閻王の
 廳に跪き給ひ多田の満仲は病中閻王の使に召れて冥府
 の有様を見了り蘇生し殊の外に恐怖し給て直ちに六角
 堂に入り入道し念佛し給ひけるに汗と涙と疊を打透し
 たるとぞ六國を并吞し四海を囊括して八蠻の外までも
 震ひ恐れたりける秦の莊襄王も鬼趣に墮して苦を受け
 周の武帝は鐵梁の責を受け梟雄天下に聞へたりける秦
 の白起は糞泥獄に沈みて後明の洪武の始め吳山の三茅

遠 羅 天 釜

観なる處に於て雷白き蜈蚣の長け尺餘なるを震殺しけるに背に白起と云へる文字ありくと記しき由罪業の空じ難き事知ぬべし謂事なかれ塵務繁絮にして參禪に暇なく世事續紛として工夫續き難しと須らく知るべし眞正參禪の衲子の前には塵務なく世事なき事を譬へば茲に一人あらんに往來絡繹たる巷稠人廣衆の中に於て錯つて二三片の金子を遺落したらんに人自しげしとて棄てや置べき物騒しとて尋ねずやあるべき多くの人々を押わけかいくつても一回尋ね出して我手に入らざらん限りは心頭休罷する事能はじ然らば則ち塵務繁しとて參禪を怠り世事煩はしとて工夫を廢せん人々は諸佛無上の妙道を以て彼兩三片の黄金程には貴び惜まざ

遠 羅 天 釜

る者に非ずや塵務の上へ世波の間に於て彼黄金を遺落したりし人の如く專一に究明したらんには誰か歡喜の眉を開かざらんや此故に妙超大師云く見るやいかに加茂のきをひの駒くらべかけつかへすも坐禪なりけりと眞珠菴主は此意を述して看經すべからず坐禪すべし掃地すべからず坐禪すべし茶の實種べからず坐禪すべし馬に乗べからず坐禪すべしとこれは是眞正參禪底の古實なり吾正受老人常に云く不斷坐禪を學ばん人は殺害刀杖の巷號哭悲泣の室相撲掉戲の場管絃歌舞の席に入りても安排を加へず計較を添へず束ねて一則の話頭と作て一氣に進んで退かず譬へば阿修羅大力鬼に肘臂を捉られて三千大千世界を遶る事千回百匝すと云へども

遠 羅 天 釜

正念工夫片時モ打失せず相續不斷なる是を名て真正參禪の衲子とす十二時中只而皮を冷却し眼睛を障却して毫釐も人情を交へざれと寔に貴ぶべし兵法にも亦云はずや且戰且耕是萬全之良策也と參學もまた爾り工夫は且戰ふの眞修内觀は且耕の至要鳥の雙翼の如く車の兩輪の如し内觀の秘訣は予向に江湖參玄の衲子の爲に夜船閑話に書し了れり予常に此等の趣きを以て衲子の禪病を救ふ事幾人と云數を知らず中に就て重症必死に向とする者八九を治す學者必ず内觀と參學と共に合せ並べ貯はへて以て生平の本志を成せよ學道の人縦ひ參じて五派七流の大事を究得るとも若夫れ短壽ならば何の用を成すに堪んや縦ひ又内觀の力に依て彭祖が八百の

遠 羅 天 釜

歳時を閱すと云ふとも若夫れ見性の眼無んば唯是一箇老大の守屍鬼何の好事かあらん若又枯坐默照を以て足れりとせは枉て一生を錯り大ひに佛道に違せん只佛道に違するのみに非ず大に世諦もまた癡ぜん何が故ぞ若夫諸侯大夫は朝覲を怠り國務を廢して枯坐默照し武夫は射御を疎にし武術を忘れて枯坐默照し商賈は戸店を鎖し算盤を碎て枯坐默照し農夫は犁鋤を擲ち耕耘を止て枯坐默照し工匠は繩墨を捨て斧斤を抛て枯坐默照せば國衰へ民疲れ賊盜頻りに起つて國それ危からんか然らば則ち衆民瞋り恨みて必ず云はん禪は窮て不祥の大兆なりと殊に知らず古へ禪林の盛なりし時南嶽馬祖百丈黃檗臨濟歸宗麻谷興化盤山九峯地藏等の諸聖拽石搬

遠羅天釜

土水薪菜蔬作務普請の鼓を鳴して専はら動中の得力を
 求む此故に百丈大師曰く一日不作一日不食是を動中の
 工夫不斷坐禪と云此風近代地を拂つて盡蓋し斯いへば
 とて坐禪を嫌ひ静慮を誘るにし非ず大凡一切の賢聖古
 今の智者禪定に依らずして佛道を成就する底半箇も亦
 無し夫戒定慧の三要は佛道萬古の大綱なり誰か敢て輕
 忽せんや然るに向に謂ゆる禪門の諸聖の如きは超宗越
 格眞正無上の大禪定擬議するときは則ち電轉じ星飛ぶ
 羝羊の眼狐狸の智如何ぞ敢て窺知る事を得ん縦ひ又默
 照枯坐して立地に成佛し立地に大光明を放つ底の好事
 ありとも諸侯大夫士庶民家萬般の公務千般の家事ある
 何の暇あつてか片時も打坐する事を得んや此に於て病

遠羅天釜

と稱して公務を通れ家業を廢して三五七日一室を閉戸
 牖を鎖して幾枚の團蒲を重ね一枝の香を挾んで坐すと
 云へども平生の塵務に疲れて一寸坐すれば一丈睡り三
 合の坐禪には千萬解の妄想を集む既にして眼を瞠り牙
 を咬み拳を握り梁骨を堅起して坐すれば萬般の邪境頭
 を競つて生ず越て額を攢め眉を皺めて覺へず悲泣して
 曰官途道業を妨げ仕路禪定を障ふしかじ官を辭し印を
 解て水邊林下寂寞無人の處に在つて恣に禪觀を修し永
 劫の苦輪を遁んど大に錯り畢り大凡人の臣たるの道は
 主君の飯を喫して主君の衣を纏主君の帶を結で主君の
 刀を帶水も亦他處より擔ひ來るに非ず耕ずして食ひ織
 ずして纏ふ身體手足髮毛爪齒總に是君恩の所成なり恣

遠 羅 天 釜

麼にして成長し來つて三四十歳に至つて主君の政事を
 助け専ら王佐の才を拙で君を堯舜の君にし民を堯舜の
 民にし専ら君恩に報答すべき時^{いたつ}到て袖裏に密に念珠をつ
 まぐり口頭^{がすか}幽に佛號を唱へて出仕に懶く公務を怠り方
 寸の君恩に報答すべき心もなくて動もすれば病と稱し
 て退んとす恁麼の志行にして縦ひ三年五歳陰僻の處に
 在て精鍊刻苦し思想盡き情念止に似たりと云へども肝
 膽傷み悴け心上常に恐怖多く鼠糞の落るを聞ても胸間
 裂るが如し大將にも諸卒にも何の専途にか立べき萬一
 國家の大事あらんにかゝる人々を引て一虎口の門戸を
 堅めたらんに敵軍潮の如くに湧き旌旗雲の如くに覆ひ
 火砲は雷の落かゝるが如く響きわたり貝鐘は山も崩る

遠 羅 天 釜

る許り轟き鳴り戈戟は氷の如く拔連たるを見聞ば飲食
 咽に入らず混震にふるへて手綱とる事さへ叶はで鞍つば
 にすがり平て動もすれば自ら震ひ落んとす果は歩兵の
 爲に獲らる何が故ぞ斯の如くなる只是三年五歳寂點枯
 坐の致す處なり縦ひ熊谷平山なごが如き勇士也とも斯
 の如く修行したらんには豈に震へざらめやこの故に祖
 師大悲善巧有てこの正念工夫不斷坐禪の正路を指す諸
 侯は朝覲國務の上へ士人は射御書數の上へ農民は耕耘
 犁鋤の上へ工匠は繩墨斧斤の上へ女子は紡績機織の上へ
 若是正念工夫あらば直に是諸聖の大禪定此故に經に曰
 資生産業皆與實相不相違背と若夫れ正念工夫無んば老
 狸の空穴に睡るが如けん悲むべし此道今の人棄て土の

遠 羅 天 釜

如くなる事を往々に我法二空の黒闇谷を認得て向上最上の禪なりとして日々眉を皺め額を擗て死蠶の繭中に在が如く祖庭は遙に雲煙を隔つ佛經を嫌ふ事跛鼠の猫兒を避るが如く祖録を忌む事轄兔の虎聲を聞に似たり殊に知らず此は是二乗常没の舊窠相似の涅槃なる事を此故に宗峰大師曰く三年までわれも狐の穴にすむ今はかざるゝ人も理りと悲歎し給ひき去程に肇公は此を困魚止宿病鳥栖蘆少しき安事を知て大に安事を知すと呵し給き真正参玄の上士は入理の淺深如何ん見道の精麤如何んに在らくのみ誰か僦が在家出家を擇ばん誰か僦が朝市山林を論せん古への相國公美大夫陸宣尙書陳操都尉李公楊公大年張公無盡等の諸君子の如きは見性わ

遠 羅 天 釜

が掌上を見るが如く参玄わが肺腑より出るが如し佛海の深源底を蹈翻し禪河の毒波浪を並吞す智鑑高明識量寛大閑神恐れ去り野鬼悲み潜む各朝廷の政事を助けて天下を泰山の安きにをく誰かその堂奥を見ん張公の如きは官宰輔にのぼり位人臣の頂を極む王佐の才豊にして君信じ臣貴み士敬し民懐く天膏雨を下し君淋字を賜ふ壽き百齡に近ふして澤を四海に流へ民堯年の秋に傲り人舜日の暄を負ふ上君恩に報答し傍ら法寶を鎮護す寔に天下の人傑なり此故に言在家成道張無盡食祿究禪楊大年と實に千歳の美談ならずや蘇内翰黄魯直張子成張天樂郭功甫等其餘の老夫が未だ見聞せざる底の諸君子豈にそれ際限あらんや見道各々林下の人に超過す常

遠 羅 天 釜

に萬機の政務を佐け肩を萬國の衣冠に交へて銀魚金龜の朱紫貴海中に立禮樂射御の間だ進退揖讓の席に臨て片時も道情を打失する事なく遂に祖庭の玄微に徹證すこれ皆正念工夫不斷坐禪の靈驗ならずや佛道微妙の深恩ならずや祖庭孤危の威徳ならずや彼默照枯坐を足れりとし心源靜寂を禪なりとして丘壑に餓死する底の類と寔に霄壤の間なりこれ謂ゆる尖兔を得ざるのみに非ず鷹子も亦打失する者に非ずや何が故ぞ徒に見性する事能はざるのみに非ず主恩も亦癡す太だ憐むべし寔に知る得力の淺深は進趣の當否に依る事を工夫若し一人と萬人と戦ふ底の氣力あらば豈にそれ林下と室家とを擇ばんや若それ見道は特り林下の人の方に在といはば

遠 羅 天 釜

民の父母たる人の子たるとは望を其間に絶んか縦ひ林下に在とも道業密ならず志念純ならずんば何ぞ室家に異ならん縦ひ又室家に在とも志願濃厚に操履堅實ならば何ぞ林下に異ならんや此の故に言思ひ入る心の中に道しあらばよしや芳野の山ならずとも只兎にも角にも諸大將の心がけ給はんずる坐禪は此正念工夫の不斷坐禪に超へたる事は侍るべからず此は是二百年來癡れ果たる古實にて侍り何をか正念工夫と云ぞとならば咳唾掉臂動靜云爲吉凶榮辱得失是非束ねて一則の話頭となして臍輪氣海丹田の下に鐵石の如くに突居へ本尊には即ち大樹君諸侯大夫は吾同業影向の諸菩薩衆近習外様の大小の諸臣は吾が舍利弗目連等の二

遠 羅 天 釜

乘の大弟子衆士庶萬民は吾が赤子の如くなる所化の衆生なりと思ぼして専ら仁恕の心これあるべし袴肩衣は直に是七條九條の大法衣兩口の打物は禪板机案馬鞍は一枚の坐蒲團山河大地は一箇の大禪床上下四維十方法界は自己本有の大禪窟陰陽造化は二時の粥飯天堂地獄淨刹穢土總に是吾が脾胃肝膽樂府内外三百壘は朝夕の看教誦經千百億の須彌山を束ねて以て一片の脊梁骨とし其餘の進退揖讓射御書數皆是菩薩萬善同歸の妙行なりと觀念し大勇猛の信心を抽で彼内觀の眞修に和して起居動靜の間に於て那時か是打失の處那時か是不打失の處と時々てんけんに點檢する是古今の賢聖眞修の正路にて侍り去程さるほに子思子も道は須臾も離るべからず離るべきは道

遠 羅 天 釜

に非ずと宣のたまひき魯論里仁の篇には造次ニモ必於テシニ是顛沛必於ニモ是とは片時も打失する事なかれとの教にて侍り此道とは中庸の正道を云へり正道とは斯經難持若暫持者我即歡喜諸佛亦然と説給ひたる法華經の事にて侍り法華經とは即ち正念工夫の大事を云へり工夫とは自己本有の有様を指事さすことなりと覺悟これ有べし生死の大事を透脱透だつし佛祖の正眼を睛却する底の眞實見性の正修にて侍れば中々容易の事にし侍らず只肝心は動靜二境の間逆順縦横の上へに於て純一無雜打成一片の眞理現前して千人萬人の中に在ても萬里の曠野に獨立したる心地あつて彼龐老おんろうが謂ゆる雙耳如聾眼如盲なる境界は時々こゝに此あるべし是を眞正大疑現前底の時節と申す事に侍り此時退

遠羅天釜

かす勤め進み給は、氷盤を擲擢するが如く玉樓を推倒するに似て四十年來未だ曾て見ず未だ曾て開ざる底の大歡喜あらん若人自家見性の眞偽如何ん得力の精庵如何んを知らんと欲せば先づ須らく謹んで傳大士の偈を見るべし何が故ぞ未透底の士は句に參せんより意に參すべし己透底の士は意に參せんより句に參すべし偈に曰空手把鋤頭步行騎水牛人從橋上過橋流水不流と又曰燈籠跳入露柱佛殿走出山門又懷州牛喫禾益州馬腹脹又張公喫酒李公醉欲知端的北斗向南看寒山子の偈に青山白浪起井底紅塵颺若人見性分明なる事を得ば此等の言句は吾掌上を見が如けん若然らずんば言事なかれ見性したりと縦ひ又如上の言句に於て逐一分明に見得徹し

遠羅天釜

たりとも足りとする事なかれ棄去て者疎山壽塔の因縁南泉遷化の話乾峰三種の病五祖牛窓橋の話宗峰大師曰朝結眉夕交肩我何似又本有圓成國師曰栢樹子話有賊之機此等の話頭毫釐も疑ひ無事を得ば須らく知るべし見處佛祖と同一模範なる事を參立の上士と稱して何の愧る處かあらん何が故ぞ參禪は各誓つて佛祖の心を明めん事を要す若夫佛祖の心を明らめ得ば豈に夫佛祖の語話を明らめざらんや若夫未だ佛祖の語話を明らめ得ずんば須らく知るべし未だ曾て佛祖の心を明らめ得ざる事を此故に七賢女經曰佛言我弟子大阿羅漢不能解此義唯有大菩薩衆應解此義と此義とは何ぞや西天此土祖々相傳し來る底の向上の秘訣なり此義を了知せしめんが

遠 羅 天 釜

爲に此難透の話を留む此故に眞珠菴主有偈曰天台五百阿羅漢身着法衣出人間神通妙用可還爾佛祖不傳妙難
 々菴主は即ち息耕東海七世の孫にして其知見斯の如く痛
 快なり貴ぶべし此時眞風尙未だ落ざりし事を今時奴郎
 辨せず玉石分たざる底の無眼禿奴の部屬往々に言ふ自
 心即ち是佛け話頭了じて何かせん心淨ければ淨土淨し
 語録を閲して何の用ぞと此等の類を未得謂得未證謂證
 無慚昏愚の外道とす竊かに彼が心と稱する所以の者を
 見れば八識頼耶愚癡無明の闇窟なり錯々賊を認て子と
 なし錯を以て錯に傳へて祖々傳來の妙道なりとして人
 の參禪學道艱辛清苦するを見ては彼と彼とは圓頓の直
 指を知らず二乗の根性なりそれとそれとは向上の禪を

遠 羅 天 釜

會せず聲聞の部類なりと彼が謂ゆる圓頓の直指點檢し
 見來れば楞嚴に呵し給ふ無明の元本なり彼二乘聲聞の
 人々には霄壤遙かに劣れり而して逮得己利の賢聖を捉
 て妄りに輕賤す寔に笑ふべし或は又一般あり無の字に
 もせよ栢樹子にもせよ一向に手脚の着ざる處を禪道な
 りと妄想して以て透過とす此は是一等の惡風俗膏盲難
 治の大禪病錯を以て錯に就く底の不救の傳屍病總にこ
 れ妄分別眞正參學の上士の如きは則ち然らず參し參
 じて參すべき無き處に到つて理盡き詞ば究まつて技も
 亦究まり天涯に手を撒して絶後に再び蘇つて而して後
 に因地下の安堵は得る事に侍り左もなくして無明妄想
 生滅の心行を以て難透難解の秘訣換骨奪命の大事を彼

遠 羅 天 釜

此沙汰致し侍らんは恐ろしき事なり佛も生滅の心行を以て實相の法を説事なかれと堅く制し給ひたるぞとて正受老漢は常々眉を皺められ侍りき然るに雲水往來の僧侶十が八九は大口を開ひて傳燈千七百箇の大事に於て毫釐も疑ひは侍らずなご、會釋もなく云散す底多し試に一則を舉揚すれば拳頭を墜るあり一喝を吐くあり十が八九は疊を扣く者多し輕々に拶着すれば見性は存じも依ず學文の功さへ無くて一文不遺頑陋無眼の人々なり斯恐ろしき無頼不敵の働きは何れの知識の許より習ひ持ち來るやらん去程に三五年も斯くわめきあるくよと思へは天竺へ渡りたるか唐へ行たるか爲に成たるか筵になりたるか果は音も臭もなく成行は幾等と云數

遠 羅 天 釜

を知らず蟲齒の藥にも成らざる底の悟りなり惜むべし棟梁の質あつて神俊の才を具足し參立力を盡し琢磨功を重ねば佗後馬祖石頭にし去り臨濟德山にし去て天下の蔭涼樹とも成り去るべき底の人々苗にして秀んとする肝心の時節筋なき妄解を習ひ來つて人の參禪學道精神を盡すを見ては馳求の心止まずと云て地空を扣いて大笑す爾が頑空無記頼耶の暗窟を認め得て歇得する底の糟見解三日五日眉を皺めば驅鳥の童子も亦須らく解すべし況んや他人の處より習ひ持來らんをや佛祖も手に餘したる者に成て初めは信する人も問これあれども元來無記暗鈍の瞎凡夫次第に在家實頭の人々にだも及ばず果は檀那施主にも忌嫌はれ行方知らず成り行くは

遠 羅 天 釜

近年行脚の風俗なり如何がして真正の得悟は得る事ぞ
 とならば塵務繁絮世事紛然七顛八倒の上へに於て譬へ
 ば勇士の大敵に取り圍まれたらん時に匹馬單鎗大勇猛
 の精神を震つて一方を突き破つてかけ拔んず時の心持
 にて正念工夫絶すりもなく精彩を着け手脚の下すべき
 様もなく四面空洞として心身ともに消失せたる心地は
 時々これ有者に侍り此時恐怖を生せず勵み進み侍れ
 ば一旦の得力は間もなく豁然たる者に侍り總じて參學
 は妄念情量と戦ひ昏沈睡魔と戦ひ動靜違順と戦ひ是非
 憎愛と戦ひ一切の塵境と相戦ひ正念工夫を推立もて行
 張合にて不慮の省覺はこれ有事に侍り彼勇施菩薩の如
 きは大重禁を犯じて懺悔すべきに地なし徒に憂悲惱亂

遠 羅 天 釜

す忽ち自ら大誓を發して憂惱と戦つて黙坐す忽然とし
 て無生を悟る雲門大師は老睦州に左脚を逼折せられて
 大悟し蒙山の異禪師は痢疾を患る事晝夜百次身體苦し
 み疲れて前面只死あるのみ此に於て大誓願を起し苦痛
 と戦つて死坐す少焉腸大に鳴動する事數回痢疾は拭
 ふが如く平愈して大に得所あり大圓寶鑑國師の如きは
 華園に入て聖澤の庸山老師に謁して所見を演山漫罵し
 て打て追出す師憤然として煩暑の日竹林の中に入て寸
 絲かけず裸形にして枯坐す夜に入て蚊子百萬競ひ來つ
 て身上に集り圍んで師の肌を咬む此に於て痾痒と戦つ
 て齒を切り拳を握つて癡坐す正氣を打失せんとする者
 殆んど數次圖らず豁然として契悟す昔し調御世尊は雪

山に在て苦修六年皮骨連立蘆芽膝を穿つて臂に至り慧
 可大師は臂を断つて自の本源に徹し玄沙は泣々象骨を
 下つて蹶躡して左脚を破つて徹骨徹髓し臨濟は痛棒を
 喫して破家散宅すこれ古今の榜様なり三世古今の間に
 見性せざるの佛祖なく見性せざるの賢聖なし今時の如
 く徒に空しく胸臆の凡解を恃んで自己脚跟下の大事を
 了簡分別して以て足れりこそせば一生妄想の魔網を破る
 事能はじ小智は菩提の妨とは此等の輩に侍り中古禪門
 の盛んなりし時正念工夫心掛け給ひし士大夫は公より
 退るの閑暇の日は如何にも健かなる士卒七八箇を従へ
 大馬に跨つて兩國淺艸などに等しき人立多る所を用有
 げに馳せ廻り給ひける由是は動中の工夫親疎如何得失

如何を矯し試ん爲なりける由去程に嵯川新右衛門は闘
 諍喧嘩の席に望みて大省力を得太田道観は陣中に在て
 組布れながら和歌を詠じ正受老漢は其里へ狼の數限り
 もなく來り集つて讎をせし時に所々の幕原に七夜まで
 坐し明したりとは是は彼等に頸筋耳の根など吹臭れんす
 る時に正念工夫相續間斷ありや否やを矯し試みん爲な
 りと申されき書寫の性空上人の常に悲歎し給ひけるは
 世念濃厚なれば道念輕微なり道念濃厚なれば世念輕微
 なりと宣ひきつらく思ふに果しもなく管くしき繰
 言披見も六箇布思すべき者を世念濃厚に書續けたるに
 似たれども鶴林半死の殘喘長庚曉月頼みなき命に何の
 不足の處有てか尾を搖かして憐みを乞んや寵遇を權勢

遠 羅 天 釜

の門に栽るにし非ず聲名を世波の底に鉤るにし侍らす
 是を序に人々の道情をも助けよがし法門無量誓願學と
 申す事の侍れば菴居の人々の他後法施の一助ともなれ
 かし且千兵は得易く一將は求め難しと申す事も侍れば
 書中少にても取べき處あつて幕下の道情をも助け増て
 禪學成熟し給はいその餘波必ず左右の人々に及ばん左
 右若其恩波に浴せば其澤必ず一城の人々に及ばん一城
 若その恩波に浴せば其澤必ず一國の人々に及ばん何が
 故ぞ一人の心は千萬人の心なる故に終に天下國家に及
 ぼし上王化を佐け下庶民を利せん然らば則ち宇宙の間
 那箇の盛事か是に如んやこれ老僧が生平の微志なり若
 然らずんば何の追從にか終夜孤燈を挑げ老眼を摩塗し

遠 羅 天 釜

て果しもなき問す語りを繰返し書送り侍るべきや
 道理ある事に思さば捨置ず熟讀し給ひて内觀養生の秘
 術に契ひ給ひ心身共に壯健にして速かに參禪得力因
 一下の歡喜をも得給へがし次に願くは此内觀の加被力
 に依て武内の宿禰浦島子が長壽をも保ち給ひ上天下の
 政事をも輔けて萬民を憐撫し内法寶を衛護し飽まで法
 喜禪悅の樂を究めて法成就にも至り給へがしと思ふ許
 りの寸志にて侍り老夫壯年より思ひ付侍りけるは正念
 工夫の勝手には武士の身の上へ程よき事は有べからず
 武士は明け暮れに身を懦弱に持事叶す出仕にも附合に
 も如何にも嚴重なる者なれば髮結立て上下か又は袴羽
 織にて大小手挟み折目高なる起居の上へには正念工夫

遠 羅 天 釜

は溢れ建る、程潔よく打見ゆ増てよき駿馬の太く逞きに打騎て百萬騎の敵軍をも人無き處を通る如く乗破りしもて行たらんには出家は一年にて得力これあらば武士は一月出家は百日にて得力是あらば武士は三日にも利運は開かるべき者を志なく案内知り給はぬ故に生啜磨墨とも云べき大馬の背上に闇々と八石五斗の無明妄想の重荷を建、積載ていかめしげなる貌曲してあたりを拂つて乗連、打通り給ふは近頃以て残念なる風情ならずやかく大切なる場所をば遣過して我々は仕官の身なれば坐禪などする暇隙は勤めの内は存じも寄ぬ事なるぞなご宣ふ人々は海中に在乍ら水を尋ぬる心地

遠 羅 天 釜

こそすれ四十二章經には人に二十の難あり豪貴學道難と誠なる哉王侯より庶人に至るまで榮耀富貴の人々は數限りも無事に侍れど來生の苦輪を恐れ出離の要道を尋ね求むる人々は世界を一掃して一人も見へ侍らず是定めて金口の所説に違はじとの心なるべし只富貴の上にも富貴を貪ぼりて足る事を知らず榮耀の上にも榮耀を求めて飽事もなき世の中に何の善縁ぞや幕下のみ獨り富貴を見る事空華の如く榮耀を見る事夢幻に等しく常に無上の大道に賢慮を傾け予が艸廬を願み給ふ事既に三次昔し照烈の武侯が艸廬を願み給ひしに等し彼は三國を並さん事を圖り此は三界を越ん事を求むその趣は同じといへども志しは大に異なり昔し武侯は鋤を棄

遠 羅 天 釜

命を委ねて以て三顧に答ふ老僧豈に三顧に報ずるに片言を惜まんや如何なる法理を書贈りてか幕下勇猛の精神を増長し圖らずも宗門向上の大事を透過し恰悦の眉を開き給へがしと祈る許りにかなはぬ文章にて斯まで書續けたるにて侍り去ながら宗門向上の大事は中々文字語言の力にても誘引すべき事にし侍らず然れども修行の趣向錯まり給はずば自然に大事に契當し給はでやあるべき專使一昨烏急に回鞭を執る貴答を裁するに暇あらず頻りに癡禮の緩怠を恐る幸にして昨日宜顯廬原に歸る事を告歡踊に堪へず押へ留めて鄙酬を修す睡らざる者一夜晚陰より書して天明に至れば醜書既に五百行を得るといへども猶情實を盡す事能はず老來諧記の

遠 羅 天 釜

力無ふして前に書しけるを後又書し始め演けるを終りに亦演字々烏焉多く行々魯魚の差いあれども再看するに暇あらず裁封して顯か歸袖に附す恰かも楚鷄を籠て丹山の鳳なりと稱して王侯に進むる者に似たり電照の後請ふ丙丁童に與へて彼をして秘重せしめ給へ若又書中取るべき處あらば再たひ清書して以て進獻せん幕下書記の人々に命じて繕寫三五冊年少穎發し近習三五輩及び和田國堅が輩らに分ち與へて時々熟讀せしめ閑暇の日は幕下の股肱堤中澤の人々及び故老の舊臣良醫六七輩を召され圍み坐して聽受せしめ幕下も亦蒲團上に且つ聽且つ睡つて道情を保養し給ひ半日の餘閑を樂み給はゞ法喜禪悅の境致自然に現前して四王切利の歡

遠 羅 天 釜

樂夜摩兜率の勝界も亦羨むに足らず况や世間穢濁充滿の晏會輕浮傲奢の逸遊八音耳を蕩かし萬舞眼を昏す底の無慚無愧の幻戲をや豈に顧るに足んや此趣を以て能々勘辨これ有て近習をも外様をも我八萬の大衆なりと思ぼして密々に誘引し給はいいつしか上求菩提下化衆生の本願に契つて塵中衣冠希有の善知識誰か知らん劍を帶し鞍馬に跨つて往來しながら時々諸佛無上の法輪を轉じ給はんとは然らば則ち強將下に弱兵なしと申す事の侍れば龜氏慶喜身子滿慈等の有力の武臣は野村田村等の人々を初め旗下には幾人も出來侍るべし萬一天下の事故あらんに大將も諸卒も通身一團の眞元氣百騎を卒して萬騎に對すと雖ども從來生ある事を見ず豈

遠 羅 天 釜

にそれ死あるべけんや恰かも鐵石を突立て行が如し靜かなる事山嶽の如く疾事颼風の如し向ふ處破らずと云事なく觸る處碎かずと云事なし譬へば保元平治の亂軍中に在とも無人の曠野に立が如けんそれこれ之を眞の丈夫の志氣と云ふ君恩と法恩と並べ流て士卒を撫す誰が幕下の爲に身命を惜まんや生死の恐るべき無れば涅槃の求むべきなし十方を目前に消融し三世を一念子に貫通す皆是かの正念工夫の力に依れりかくの如くなる時は士敬し民懷き君仁に臣正し農に餘の粟あり婦に餘の布あつて上下こもく道を好んで國脉泰山の安きが如く萬世を経て衰滅なけん然らば則ち人間天上の善果これに如べからず宰官身得度者即現宰官身の大士は豈に

それ異人ならんや穴賢

延享第五戊辰曆仲夏二十五日

沙羅樹下關提老衲書

遠 羅 天 釜

卷之上終

白隱禪師遠羅天釜

卷之中

贈于遠方之病僧書

便たまりの度毎たびに貴書並びに傳語者回欽禪人便りに又々芳書殊更野外珍らしき水すい沈せん一封親切の至りに候貴兄事貴境あきる飛錫ひしやく致され候も吾等勸め申し侍れば何なにとぞ道業怠慢たいまんなく因ゆゑ地ち一下の歡喜をも得られよがしと好便よきたまりり待入候まちいり處ところに夏頃なつころより氣分悪く今程延壽堂えんじゆうどうに入れ候旨旦夕案じ暮し候者回欽禪人物語りには左程の事にもこれなく發足はつそくの二三日已前に入堂致され候由如何計り嬉うれしく存じ候氣分は如何様の重病沉痾ちんかなりともそれは世間に打任うちまかせて

遠 羅 天 釜

遠 羅 天 釜

自分こころは随分正念工夫肝要と心がけこれあるべく候病中
 苦患あひだの間に仕扱しなたる修行は他後如何様の逆縁ぎやくたんに逢ても
 退惰たいだこれなき物の山承やまのりはり及び侍り大切の時節ぞと思
 して努々あつ油断あぶこれある間布候三十年前去る老漢病中の
 僧そうに對して物語りせられけるは世に智慧ある人の病中
 ほご淺あや猿ましく物苦ものくるき事はなき事なるぞや智慧ある儘まに
 來方こゝかたゆく末の事ども際限もなく思ひ續つづけ看病の人の好
 惡さかを咎とがめ舊識同伴の間闊かんくわを恨み生前には名聞のどげざ
 るを愁なひ死後は長夜の苦患を恐れ郷里を思ひては羽翰うかん
 の生なせざるを憤いきり神明しんめいに祈りては感應のをそきを喚まり
 目を打塞うぎて臥居ふたるは殊勝しゆじやうに物靜ものじやうかなれども胸中むねぢゆうは
 九國の合戦くわくわよりも騒さわしく心上じやうじやうは三塗さんずの衆生しゆじやうよりも苦くるし

遠 羅 天 釜

三合さんごうの病やまひに八石五斗の物思ものおもひなるべしかく病狂やまひれ死し
 たらんには後の世の有様こそ推量おしはからるれ物思ものおもひして藥
 にも養生じやうじやうにもなるためしならば吾々われわれも打うより手傳てつたひて
 物思ものおもひ得えさせんなれども痛いたく物思ものおもへば心火逆こころらひ上り
 肺金はいきん痛いたみ費ついへ水分すいぶん枯渴こかつし寒熱さんねつ止事とじじなく自盜じたうの二汗にあせは次
 第ついでに繁しげくて果はは命根いのちのねも亦保またたち難がたきに至いたる是皆こゝろ平生へいじやうの志
 行こゝろ懶惰まんとにして少し許ゆるりの病やまひを妄想まうじやう心の手傳てつたひて夥おほしく
 そだて上あたるものなり然しかれば病やまひに害あせられたるにはあ
 らず妄念まうねんに食殺じきころされたるなるべし寔まことに妄念まうねんは虎狼ころうより
 恐おそろしきものなり虎狼ころうは戸牆こゝろさしたる内うちゑは入事いりじは叶
 はぬものなり妄念まうねんの狼こゝろは坐禪ざぜん靜慮じやうりょの床の上へ七條九條
 の袈裟けさの中うちゑも亂みだれ入奴いりやつなり或病人あるびやうじんはほろくと打泣うちな

遠 羅 天 釜

て吾等程薄福なる者はなきぞとよ偶に受難き人身を受
 貴き僧形を得ながら辨道の功をも積ず佛道の光をも見
 ずして朽果んずる事の口惜さよなど泣口説たるは殊勝
 に愛らしけれども是も懈怠油断の大不覺者のなれの果
 なるべし大凡辨道工夫の爲には病中程よき事はこれあ
 るべからず古來賢達の人々の巖谷に身をよせ深山に形
 を隠し給ふ事は世縁を遠ざけ塵務を捨離れて道業純一
 にはげみ勤んが爲なり然るに病中を除ひて別の山谷な
 く病中を去て外の深山はあるべからず病中の人は托鉢
 作務の勞倦を通れ使僧知客の應對も省き廣衆雜話の喧
 噴もなく僧堂の治亂を知らず常住の豊儉を見ず死活は
 天運に投かけ饑寒は看病の人に打任せて只狗猫なご惱

遠 羅 天 釜

伏たる體にて何の合點もなく何の了簡もなく只一向に
 蒲團上の事を忘却せず自己の正念を打失せざるを第一
 として生も亦夢幻死も亦夢幻天堂地獄穢土淨刹悉く抛
 擲下して一念未興己前萬機不到の處に向つて是何の道
 理ぞと時々點檢して正念工夫の相續を肝心とせばい
 つしか生死の境を打越悟迷の際を超出して金剛不壞の
 正體を成就せん事これ眞箇不老不死の神仙ならずや人
 界に出生したる思ひ出ならずや圓顛方袍の威徳ならず
 や佛道微妙の靈驗ならずや眞正參禪の人の前には吉凶
 榮辱逆縁順縁盡く道業を助る糧となり懈怠惰弱の人の
 前には假初の塵事芥子許りの病氣も夥しき障りに仕な
 して果は宿業のわざなり般若に縁こそなけれなご種々

遠 羅 天 釜

の道理をつけて遠からぬ般若を遠ざけ根もなき業障を種ぞだて、一生を錯る程の苦々しく情なき事はなきぞとよ古來より重病を受ながら疑團打破の人々は間多き事なるぞかし中比去老和尚の重き腫物を受給ひて背後は爛冬瓜の如く腫塞がりて目もあてられぬ病惱なりけるに湯藥食事進め参らするより外は人をも近つけ給はで目を打塞ぎて惱み伏し給ひけるにある時法眷の人々兩三輩見來りて見問上りける處に外療の人來りて土肉とらんとて膏藥に藥加へ参らせたれば今夜は常よりも痛ませ給ふ事も侍りぬらんかゝる貴き御身に心なき腫物の出來りて日數多く惱ませたる御いとをしさよ去にても今日よりは愈肉の上りて目出度快氣ましまさんを

遠 羅 天 釜

待奉る許りなるぞやとて撫勞り申しければ上人は濃寢入たる人の目打覺たる御顔ばせにて人々はみくこそ見來り給ふもの哉包みはつべき事ならねば物語して聞せ申すべきぞ誰々も近寄給ひてよ扱も此度の病惱は愚老が爲には貴き善知識なるぞや腫物の蔭にて二十年の非をしり四十年の素懷を遂たる事の嬉しさよ重病受ざりし已前は悟りに事欠たる事もなく修行に不足もなき境界なりと思ひて修行も打捨意面もなく供養など受會釋もなく起居振舞けるが思はずもかゝる重痾に沈みて五體も煎あぐるが如く骨節も碎け離るゝ許りなれば氣遠く心塞りて墨繩衆合焦熱叫喚の苦患を纒に形體に集め上せたる心持にて悟りも見解も何地へや行ぬらん半點

遠 羅 天 釜

の力ちからをも得ずして残るものとは想念と苦痛とのみなりければあな口惜くちをしかく惱なやみ苦くるしみ死したればとて誰恨たれをむべき事にしも非ず迎助むかへたすかるまじき命なるに是これより正念工夫に取掛りて苦惱や勝べき工夫や勝べき心の長の及ばん程は責戦せめたかはんずものと思ひ定めて傑烈の大志を憤起し勇猛にはげみ進すすめるに一度も二度も苦しく絶入たぎる心地しけるが打返し取直して間斷もなく進みける程にいつしか戦ひ勝て晝夜のさかひもなく寐寤ねどの隔へだもなくて終つひには打成一片の工夫現前して此十四五日以来は想念も苦惱も雲霧くもぎりなごのはれ失うたる心持にて大安樂なるのみに非ず真正生死不二佛魔同體の眞理に契當かいてうし唯一乘金剛不壞の奥義おくぎに徹底したるぞかし今日より後

遠 羅 天 釜

は如何様の逆縁重障なりとも菩提を妨ぐる事はあらじと覺ゆるぞ人々も少し許りの會處得力あらんを頼み給ひて茲こゝはの時に至つて愚老などが如く興けさまし給ひぞ返かへ々も健すこならん時に正念工夫怠り給ふべからず賢かしこくも煩わづらひける事ことは簡程かんじやう目出度事めでたきことや有べき思へば此度このたびの腫物しむぶつは愚老が爲には上うへもなき善知識ならずや然らば則ち如何なる供養をもし如何なる讚嘆をも述度のたま思ふに次第に愈いよ行事ぎやうじの名殘惜なごりをしさよとて打笑うちわら給ひけるを其時隨侍申しける僧の物語しけるを聞たるぞかし又或眞言家あるしんごんけの驗者あかしなりと聞へ給ふ法印の御房ごぼうの重おもき傷寒を惱給ひて夜晝よるの分ちもをわさでうなりごめき給ひけるを弟子の小法師ひやくしの小黠氣こさかしげなるが打聽うちきてあの御房の日頃ひごろの氣情きじやうにも

遠羅天釜

似給はず吾等を呵責し給へる時の言葉にも似給はであ
 のうなり叫び給ふ事よとて打笑ひければ上人も打笑て
 やをれ小法師よ三日已前のうめきは叫喚泥犁の苦痛三
 日已後のうめきは最大微妙の法音なるぞ慢り笑ひて誹
 謗正法の御爵を蒙るべきぞと云はれければ小法師かへ
 して左許り早く手の裏翻す如くに成佛ばし仕給へるに
 社と申しければさればとよ佛も懈怠の衆生の爲には淫
 槃三祇にわたり勇猛の衆生の爲には成佛一念に在と説
 給へるぞや去し頃病苦の堪難くて次第に性體もなく惱
 み行まゝに來生の業苦を恐れ生前の行相を悔て泣明し
 けるが思ひ直して大日不二の觀念に入目を閉齒を切り
 て間もなく勤め進みたれば貴やないつしか病惱は搔拭

遠羅天釜

ひたる如く打消病臥たる形骸は瑜伽微妙の寶印と現じ
 圖らずも金剛不壞の正體を成就し此うなりごめく聲は
 三密不思議の大陀羅尼と冥合し寢たる床は毘盧本有の
 大道場と打成四重圓壇の大漫荼羅は心上に嚴然として
 目前に燦爛たり嬉しや忽ち有情非情同時成道草木國土
 悉皆成佛の素懷をとげたるぞや小法師原が聞知べき事
 にしあらねどかく有難き惠日に逢たる目出度さに物語
 りはするぞかしとて嬉し泣に打泣く語られけるが後
 には道業比類もなくをはしける山其外異國にも殊宏の
 湯厄蒙山の痲疾何れも病に依て道心進み給ひける人々
 は問多きぞかし和僧達は左許りの小病にけぎたなく云
 甲斐もなき有様かななごかは昔しの人々にも劣るべき

遠 羅 天 釜

や只今死なんすとも正念工夫目出度て死に給んには眞の佛祖の兒孫たるべきぞかくいへばとて重病受んを待て參禪工夫せよとにはあらずけなげに健かならんずる人々も日夜に怠らず彼人々の如く用心したらんには十人は十人百人は百人ながら學道成就せざる事はあるまじきぞ兎にも角にも正念の工夫程貴ぶべく重んずべき事はなき事なるぞとよ正念の端的未だ悟入なからん人々は眞正の導師に見へて第一に決定し給ふべし決定あらん後は四威儀の間正念工夫打失せざるを第一とすべし大慧禪師曰那時是打失處那時是不打失處一切處に於て如是點檢せよとこれは是從上の諸聖正念工夫親切の様子なりこれ則ち萬古不易の正修なり是を直心とも佛

遠 羅 天 釜

性とも菩提とも涅槃とも無位の眞人とも云なり此眞人は空劫以前空劫以後少しも病氣なく鼻もしみたる事はなき人なるぞ是を法華には久遠實成の古佛と稱歎し給へり南嶽の隨意願行に昔在靈山名法華今在西方名彌陀濁世末代名觀音と釋し給へるも此眞人の事なるぞかし此人を供養し此人を尊信し此人に親近して打失せずんば何れの病か治せざらん何れの道か成せざらんや佛法中には病疲れたる老女瘦悴けたる老夫なりとも正念工夫間斷無んば無病堅固の有力の人とす縦ひ七尺八尺の身財あつて身子の智圓かに滿慈の辨饒にして三經五論を講じ得五家七宗の奧義を究め盡して力周鼎をあげ眼寰宇を空じたりとも正念工夫なからん人をは臭爛膨壞

遠 羅 天 釜

の死人とする事なりあひかまへて容易に心得べからず
 寔に保ち難く寔に守り難きは正念工夫の大事なるぞや
 末代の悲しさは人毎に名聞の心強く利養の心盛にして
 道心ありげに見せかけ莊り立れども正念工夫決定の人
 は得難き事なり増て正念工夫相續不斷の人を求むるに
 千人萬人が中に一人もなき事なるぞ老僧十三歳にして
 此事ある事を信じ十六歳にして娘生の面目を打破し十
 九歳にして出家三十五歳にして此山に遁居す今年六十
 五に向とす中間四十年萬事を放下し世縁を杜絶し專一
 に相守て漸く五六年來眞箇正念工夫の相續は得たりと
 覺ゆるぞ檀那施主に輕薄追従し利養名聞を希望貪求し
 ながら參禪工夫せんとは寔に片腹痛き事なり往々に師

遠 羅 天 釜

學ともに常住の潤澤を榮耀とし多衆鬧熱を宗風とし辨
 才利口を智慧と思ひ衣食の結構を佛道に充つ尊大美麗
 を道德とし人の信仰を法成就の時なりとす悲みても尙
 悲むべきは得難き人身を名聞の奴婢に責使ひ上もなき
 佛心をば妄縁の塵埃に吹埋ませて此の招請彼この供養
 には似合ぬ綾羅絹帛を惜げもなく着飾り得もせぬ禪道
 佛法を會釋もなく説散し無智の白衣に對しては孔明子
 房か辯口を逞ふし苦汗の財施を掠め取には目連慈子の
 神通を得たり暫時の名利を偷み求めて因果を信せず報
 應を恐れず臘月三十日孤燈獨照半生半死の際に到つて
 泣うめき七顛倒八狂亂手脚の置處なくあがき死にして
 弟子門徒の面ぶせになり給はんは違ひはあるまじきを今

遠 羅 天 釜

の人々の心ばゑにて禪道修行の人といはゞ何國の誰か
 佛祖ならざるもの有べきぞ不思議の因縁にてかゝる物
 すぎき處に來りて一夏をも明し給ふ者を何しに惡き事
 教へ申すべきや世間は知す老僧が破屋の内には甘く心
 易き佛法はなき事なれぞ只兎にも角にも修行者は吾身
 を高ぶり吾身を重んじ吾身を最負する程惡き事はなき
 事なるぞや一年狼の多く來りて此麓の里へ宛をなせし
 時に愚老は七夜まで處々の墓原に坐し明したるぞ是は
 彼等に取り圍まれ耳の根咽ぶわなど吹喚んずる時に正念
 工夫間斷ありや否をためし試みん爲なり虵にもせよ水
 神にもせよ男子たる者の思ひ立取かゝりたる事を遂す
 や置べき仕果ずやあるべきと思ひ定めて如何なる飢寒

遠 羅 天 釜

をも忍び懲へ如何なる風雨をも堪凌ぎ火の底に入り氷
 の底に浸りても佛祖の開き給ひたる眼を開き佛祖の到
 り給へる田地に到りて宗門の大事を參歇し末後の奥義
 を徹了して十方參玄の衲子を惱害し釘を抜き楔をうば
 つて以て佛祖の深恩を報答すべしと歷劫不退の大誓願
 を憤發し給はゞ病ひ何れの處にか溲泊せん古徳の修行
 に一人として疎かなるはなき事なれども中に就て玄沙
 慈明などの幾多の艱辛を歴給へるは取分貴く覺ゆる事
 なり油斷し給ひたらば果して相似の修行者になり給ふ
 べきぞ但しその相似とは似せ者と云事なり誰やの人か
 不足なき身に似せ者と成んと思ふ人はなき事なれども
 好法友の手引を受給はず道心深からずして少し許りの

遠 羅 天 釜

會處^{わいじょ}なごを頼みて口を利人^{きじん}にも貴ばれ給はゞ見事なる
 似せ者なるべきぞ操履^{そうり}を慎み正念^{しやうねん}を守りて事足り給はずば如何なる野の末山の奥にても飢死^{うゑし}寒^{さむ}い果給ふべし
 黄金は菰^{こも}に包ても黄金なれば實^{まこと}の佛祖の兒孫神明^{めいたなごころ}掌^て
 を合せて尊信し龍天頭^{りうてんとう}を低て擁護^{ようご}すべきぞかし諂^{へつら}ひ屈^{かたみ}
 て財産を積み重ねて千僧の葬儀七寶の莊嚴^{しやうげん}あつて幡蓋^{はんがい}
 目を奪^{うば}ひ道場心を驚したりとも閻王怒眼^{えんわうどがん}を張牛頭鐵鞭^{はりごつてつてん}
 を撚^{ひね}つて相待^{あひまた}んは苦しくしかるべきぞなご成^{せい}の上刻^{じやく}よ
 り丑^{うし}みつ頃^{ころ}まで物語りせられけるを傍^{かたはら}に侍りける兩三
 輩^{はい}只片時許りの心持にて感涙肝^{かんだん}に銘^{めい}し慚汗肌^{ざんあせはだ}を侵^{をか}し侍
 りき其後病中なごに此物語りを思ひ出し侍れば忽ち慙
 愧の心起りて病苦も輕^{かろ}く成行^{なりゆく}様に覺へ候故あらまし書

遠 羅 天 釜

付け遣^{つか}す事延壽堂中の人々病中の道情の一助ともなれ
 がしの心にて侍り去^{さり}乍^{あは}ら如上は正受老漢平生受用底の
 施藥にして甚だ一味單方攻撃の冷劑なり茲に又一方あ
 り尤も虚弱^{きよじやく}の人に宜し心氣の勞疲を救ふ事甚だ妙なり
 上昇を引下げ腰脚^{こしあし}を温め腸胃^{ちやうい}を調和し眼^{まなこ}を明かにし眞
 智を増長し一切の邪智を除く事大に効あり輒酥丸一劑
 諸法實相一斤我法二空各々一兩寂滅現前三兩無欲二兩
 動靜不二三兩絲瓜^{へちま}の皮一分五釐放下着一斤右七味忍辱
 の汁^{じゆ}に浸^{ひた}す事一夜陰乾^{いんかん}して抹^{まつ}す例^{れい}の通般若波羅蜜を以
 て調鍊^{ちやうれん}し丸^{がん}じて鴨卵^{あひだま}の大きさの如くならしめて頂上に安
 着す初心の行者は藥種如何斤兩如何を觀すべからず只
 色香微妙の輒酥鴨卵の大きさの如くなる者我頂上に頓^{とん}在

遺 羅 天 釜

すと観ず病者此薬を用ひんと要する時厚く坐物を敷脊
 梁骨を堅起し目を收めて端坐し徐々として身心を洵定
 めて須く思惟すべし大凡生を保つの要氣を養ふにしか
 ず氣盡る時は身死す民衰る時は國亡るが如しと此語を
 三復し了つて正に此觀を成べし彼頂上に安着する軟酥
 鴨卵の如くなる者其氣味微妙にして遍く頭顱の間を潤
 し浸々として潤下し來つて兩肩及び雙臂兩乳胸膈の間
 肺肝腸胃脊梁腎骨次第に沾注し將去る此時胸中の五積
 六聚疝癖塊痛心にしたがつて降下する事水の下にをも
 むくが如し歴々として聲あり遍身を流へ潤して下つて
 雙脚を温む足心に至つて即ち止行者再び此想念をなす
 べし彼浸々として潤下する所の餘流積り湛へ暖醱して

遠 羅 天 釜

恰も世の良醫の種々妙香の藥物を聚め是を煎湯にして
 浴盤の中に盛湛へて我臍輪以下を漬浸が如しと此觀を
 作時唯心所現の故に鼻根希有の香氣を聞身根妙好の軟
 觸を受身心共に調適なり忽ち積聚を消融し腸胃を調和
 し肌膚光澤を生じ大に氣力を増す若時々に此觀を成熟
 せば何れの病か治せざらん何れの仙か成せざらん此は
 是養性の秘訣にして長生久視の妙術なり此方始め金仙
 氏に起つて中頃天台の智者大師に到つて大に勞疲の重
 痾を治し且其兄陳秦が必死を救ふ澆末難遭の靈方なり
 宜哉此道今人知得する底希なる事を老僧中頃道士白幽
 に聞き効驗の遲速は行人の勤と怠とに在く而已怠らざ
 れば長壽を得道ことなかれ鶴林老去て大ひに老婆禪を

説と恐くは知音の一見して手を拍して大笑するあらん
何が故ぞ不臨亂不見貞臣操不臨財不知義士志

卷之中終

白隱禪師遠羅天釜

卷之下

答于法華宗老尼之間書

老夫當秋より法華講演の刻み心の外に法華經なく法華
經の外に心無と申し談じたりしを聞及ばれ怪き事に思
して書通を以てなりとも右の道理を申し越し其外にも
有難き事どもこれあらば書付遣し候様にこの御事これ
によつて大略の趣書付進じ候間何遍も繰かへし披覽致
され能々得心これあるべく候成程我等常々申し談じ候
通り心の外に法華經なく法華經の外に心なく心の外に
十界なく十界の外に法華經なし是即ち決定至極の法理

遠 羅 天 釜

にて愚老に限ず三世の如來も十方の賢聖も極處に到つては皆々かくの如く説給ふ事にて法華本文の大意は大段此等の趣を宣給ひたる事にて此外にも八萬四千の法門を設け給ひたれども皆權教の説にして方便の間を出ず至極に到りては一切衆生と三世十方の如來と山河大地と法華經と悉く不二同體なる法理を諸法實相と説給ひたる是即ち佛道の大綱なり大凡世尊一代頓漸秘密不定の法門有て無量の妙義をのべ給ひて五千四十八卷の諸經あれども其中の至極の旨は法華一部八卷の中に促り法華一部六萬四千三百六十餘字の極意は妙法蓮華經の五字に促り妙法蓮華經の五字は妙法の二字に促り妙法の二字は心の一字に歸す心の一字は却て何の處にか

遠 羅 天 釜

歸すとならば兎角龜毛過別山畢竟如何欲知無限傷春意盡在停針不語時さる程に妙法の一心は展る則んば十方法界を含容し收る則んは無念無心の自性に歸す此故に心外無法とも説給ひ三界唯心とも諸法實相とも説給ひぬ其極處に到つては法華經と云ひ無量壽佛と云ひ禪門には本來の面目と云ひ眞言には阿字不生の日輪と云ひ律家には根本無作の戒體と云ふ皆是一心の異名なりと覺悟致さるべし然るに妙法蓮華經の五字一心の源を指とは如何なる證據かあるとならば取も直さず直に此妙法蓮華經の五字よきたしかなる證據にて侍り如何となれば妙法蓮華經とは一心不思議の徳を讚歎したる題號にて一心本具の性徳を指顯したる言葉なり子細は大凡

遠 羅 天 釜

手蹟にもせよ畫圖にもせよ誰々は琴の妙を得たり誰々は琵琶の妙を得たりと云れんずる人も其妙とは如何なる場所を申す事に待るぞと問れたらん時に如何なる辯才利口の人にてても中々言葉に演る事は叶ざる事なり去程に父子不傳の妙とて吾大切なる一子にさへ教る事は能はず妙處に到つては吾とても覺るす知ぬ處より働き出る事なり人々其足の妙法の心性も左の如し只今此文を披覽し或ひは笑ひ或ひは談じ緒環の絲線出す如く果しもなく五人に逢ても十人に逢ても少しも間違もなく働きもて行事不思議なる有様ならずや然るに何物が斯の如く自由には働く事ぞと内に向ひて尋ね求むるに聲もなく臭もなし然ば一向に頑空無記なる物にして木石

遠 羅 天 釜

の如くなりやと思へば例の通り千變萬化自由自在にして有と云んとすれば有に非ず無と云んとすれば無に非ず言語道斷脱洒自在なる處を假に且く妙法とは名付給ひたる事なり蓮華とは蓮の泥土の底に有ても少しも泥土に汚されず妙なる色香を具足して失はず時を得て麗しく咲出るは此妙法の佛心の衆生に在ても穢れず滅らず佛に在ても淨からず増す佛も凡夫にて在し時は一切衆生に少しも遠はせ給はで五欲の泥土に汚され給ふは左ながら蓮の泥中に在が如し其後雪山に於て木具の心性を發明し給ひて希有なる哉一切衆生如來の智慧徳相を具すと高聲に唱へ給ひて頓漸半滿の諸經を説宣三界の大導師と成給ひて梵天帝釋に尊信せられ給へば蓮の

遠 羅 天 釜

泥中を出て麗しく發けたるが如し蓮の泥中に屹度具足して居たりし色香を水上に咲出すが如く佛も無量恒沙の法を宣給へども外より持來り給ふに非ず凡夫にてをばせし時屹度具足し給ひし佛性の有様を其儘に宣給ふ者なり衆生にてをばせし時も成佛の本懷を遂給ひて後も一心の妙法は少しも添減なきが如く蓮の泥中にありし時も咲亂れたる夏も少しも變遷なきに等し故に假用ひて且く一心の妙法に譬へ給ひたる者なり是即ち人々具足の佛心を妙法蓮華經と名づけ給ひたる慥なる證據ならずやさて又經とは常と云る字義にて常住佛性の義を顯し給ふ者なり常住佛性とは此心性は佛に在ても増もせず衆生に在ても減じもせず天地と同根萬物と一體

遠 羅 天 釜

にして曠劫以前曠劫以後少しも變易なき處を指て經とは説給ひたるなり然れば妙法は佛心の體蓮華經は佛心の妙法を譬へに設けて讚歎し給ひたるにて畢竟一心の異名なり一實二名餅を歌賃と云た程の事なり然れば眞實の法華經は手にも把れず目にも見へざる者なるを如何にやわ受持すべきぞ如何様に心得たるを法華經の行者とは云べきぞとならば蓋し三種の根機ありて下根の行者は黄卷赤軸を把ゑて讀誦書寫解説し中根の行者は自心を觀照して此經を受持し上根の行者は眼に此經を見徹し自心の面を見るか如し是故に涅槃經に曰如來目見佛性とは是なり法華經の行持は大乗至極の眞修なれば中々容易の沙汰にし非ず易き事は甚だ易く難き事は

遠 羅 天 釜

甚だ難し去程に本文にも此經難持若暫持者我即歎喜諸佛亦然と説給ひて至極大切の行持なり天台の智者曰手不執卷常讀是經口無言音遍誦衆典佛不說法恒聞法音心不思惟普照法界とこれ真正誦經の様子なり試に問卷を執ずして誦ずる底是那箇の經を自心の妙法に非ずや思惟せずして徧く法界を照すと是何物を真正の蓮華に非ずや是を無字經と云ふ徒に黃卷赤軸のみを把へて法華經なりと徧執するたぐいは彼藥帖上の記を舐つて藥なりとして病を治せんと計る者の如し大に錯り了れり若人此經を持んと欲せば十二時中胸中一點の缺曇りもなく不思善不思惡の當體を正念工夫の眞修と云去程に捨得子の偈にも欲識無爲理心中不挂絲とかくの如きの正

遠 羅 天 釜

修は三世の如來も一切の智者高僧も此處より大悟得道し給へる事にて萬古不易の大綱なり一念不生前後際斷頓悟成佛の直路なれば如來の此經難持と宣給へるも理り至極ならずや大凡三教の聖人も實處に到つては大段同じ其進修の淺深精麁に依て得力の高下はあるべけれども最初の一步は趣等し儒門には此處を至善といひ未發を中と云道家には虚無自然といひ神家者は高間が原と相傳す天台には一念三千止觀の大事とす眞言にては阿字不生觀法と云ひ家々の祖師達の坐禪をすゝめ誦經を勧め給ふも誦々唱々て一心不亂純一無雜の田地に到らしめん方便ならずや永平の開祖も行持あらん一日は貴ぶべきの一日なり行持なからん百年は恨むべきの

遠 羅 天 釜

百年なりと宣ひき定にたま〜受難き人身をうけなが
 ら何の行持の心もなく逢難き一生をやみ〜と犬猫
 なごの何の覺悟もなく朽果る如く苦しかりし三塗の
 舊里へ懲もなく立歸らんずる事口惜く淺猿しき境界か
 など涙を落すべき事なり然るに難きことは甚だ難しと
 は我得て疑ふ事なし易き事は甚だ易しとは如何なる故
 ぞとならば若人此經を手を放ちて行住坐臥にやす〜
 と持んどならば誓つて一回法華眞の面目を見届くべし
 と願ひ給ふべし法華眞の面目を一見したらん上は咳唾
 掉臂動靜云爲草木瓦石有情非情悉く皆妙法蓮華經と現
 成する故に十二時中此經と冥合す何ぞ別に持つ事を用
 んや眞の法華を一見せずして法華經を持たんと擬する

遠 羅 天

は譬ばこゝに一人あらんに手に一椀の水を擎て零さじ
 動かさじと晝夜に慎み守りて養ひ増んと願ふが如し縦
 ひ一生擎げ守つて十成なるも養ひ増す事は存じもよら
 ず自家の飢渴も亦救ふ事能はず彼二利の願行に於ては
 望を其間に絶ものなり何の用を作にか堪んや若又眞の
 法華を一見して此經を持つ人は彼一椀の水を江湖に投
 ずるが如し忽ち三萬六千頃の煙波と混合し徳澤を大湖
 と共にして飛者走る者翔る者蠢く者同く共に行て呑ん
 に盡る事なし眞の法華を見ざる人は一椀の水を擎る人
 の如し他を利する事能はざるのみに非ず自己も亦利す
 る事能はじ眞の法華を一見する人は彼一椀の水を江湖
 に投ずるが如し覺へず諸佛の大寂滅海に投入して諸佛

の眞法身戒定智慧と冥合して忽ち賴耶の暗窟を擊碎し
 大圓鏡光を放出して塵沙劫を経て大法施を行せんに終
 に乏き事なし一見法華の功德の廣大なる事上下四維等
 匹なし人あり一切諸經論を熟讀せんよりは須らく眞の
 法華を一見すべし無量の寶塔を修造せんよりは須らく
 眞の法華を一見すべし百千の佛を造立せんよりは須らく
 眞の法華を一見すべし三界の秘密を學得せんよりは須らく眞の法華を一見すべし
 須らく眞の法華を一見すべし彼黃卷赤軸のみを把るて
 法華經なりと偏執せんよりは須らく眞の法華を一見す
 べし口に百千萬部の法華經を讀誦せんよりは須らく眼
 に一回眞の法華を見るべし是實に成實不壞の高談なり
 如何して法華眞の面目を徹見すべきぞとならば先須ら

遠 羅 天 釜

遠 羅 天 釜

く大疑團を起すべし何物を指てか法華眞の面目とはす
 るぞ自己本有の妙法の一心なりと聞からに自心を見る
 にしかず自心とは如何なるものぞ白き物とやせん赤き
 物とやせん是非く一回見得すべきぞと猛く甲斐く
 しき志を震つて大誓願を起して晝夜に究め見るべし自
 心を參究するに行持は様々多き中に法華經の行者なら
 ば法華三昧の行持に越たる事や侍るべき法華三昧の行
 持とは今日より思ひ立て憂につけつらきにつけ悲きにつけ
 嬉きにつけ寢ても覺ても起ても居ても只管に法華
 の首題を南無妙法蓮華經くと間もなく唱へらるべし
 此首題を杖にも力にもして是非とも法華眞の面目を見
 届くべしと深く望をかけて唱へらるべし願くば出る息

入息を題目にしてほしき事よと随分親切に斷問もなく唱へらるべし唱へくゝて怠らずんば久しからずして心性たしかに大石などを淘居たる如くにて安住不動如須彌山の心地はほのかに覺へあるべし其時にすて置ず随分唱へらるべしいつしか聞及し正念工夫の大事に契當して平生の心意識情都て行はれず金剛圈に入が如く瑠璃瓶裏に坐するに似て一點の計較思想なく忽然として大死底の人と異なる事なけん纒かに蘇息し來らば覺へず純一無雜打成一片の眞理現前して立處に法華眞の面に撞着して忽ち身心を打失し本門壽量久遠實成の如來は目前に分明にして推とも去じ此時に當つて天台の法性寂然寂而常照の寶所に投入し眞言の阿字不生の惠

日に照され律宗の諸佛無上の金剛寶戒に冥合し淨土の即心往生極樂報土の素懷を遂水鳥樹林念佛念法念僧の妙莊嚴をまのあたり見届け娑婆即寂光の正眼を開き草木國土悉皆成佛の田地に至らん事毫釐も相違あるべからず然らば則ち人中天上の善果何事かこれにしかんや是即ち三世の諸佛出世の本懷なり一遍の題目は禪門一則の話頭と其功異なる事なし此等の趣き三世十方の賢聖扶桑八萬餘座の神慮もおわする者を老僧が毫髮ばかりもあやぶむ處あらば何しに罪作りにくだしくしき事を書贈り侍るべきや少しも疑ひ給ふべからず此上猶又怠り給はずは禪門にいはゆる左手を握て中指を咬等の心地も次第に明かなるべし今時往々に道參禪無益なり

遠 羅 天 釜

話頭了じて什麼かせん即心即佛の直指なれば念の起るをも愁ず念の止たるをも喜ばず山賤の白木の合子只生れ付たる自性の儘なるがよきぞ漆つけねば剝色こそ無れとて日々徒に盲龜の空谷に入が如し去て以て足りとす此は是天竺の自然外道の所見なり憊麼にして佛心向上の宗旨なりと稱せば七村裏の土地も亦掌を撫して大笑すべきぞかし何が故ぞこれ總に長沙の謂ゆる識神を認得する底の癡人ならずや楞嚴に賊を認て子となす終に元淨明の體を知事能はずと呵せられしは此等の部類なり殊にしらず如來は四果の聖者の諸漏已盡し我法の眞理に達し神通具足し名稱普く聞へ給ふをさる禪を知りとは許可し給はず故に經曰我弟子大阿羅漢不能解此

遠 羅 天 釜

義唯有大菩薩衆應解此義とも説給へるものを見性の功さへなくて妄に自ら尊と稱すは何の心ぞや人は只兎もあれ萬縁を抛擲して唱るに越たる事はなき事なり去ながら題目ばかりの利益なりと偏執し給ふべからず眞言に限らず淨土に限らず何れも優劣あるべからず淨家の人々は專唱稱名の功力に依て是非く一回唯心の淨土己身の彌陀の妙相を見届けでや置べきと決烈の大志を憤起し頭然を救ふが如く聞もなく唱へ進みたらんに佛も去此不遠と説給ひたる者をなごや七重の寶樹八功德池の有様を見届けずやはあるべき眞言の人々は陀羅尼微妙の威力に依て是非とも阿字不生の大日輪を拜し奉るべしと禪門に於て一則の話頭を舉揚するが如く精進

遠 羅 天 釜

勇猛の憤志を震つて繰たらんに高野大師も不轉肉身と唱へ給ひたる者をなごかは彼金剛不壞の正體を磨出さずや有べき何れも死後を待て利益に預んと打延し給ふは不覺油斷の至り覺束なきものぞかし遠き事とな歎給ひぞ八重の潮路を隔てたる唐土天竺の事を見給へ聞給へと云にこそ遠き事とは歎くべけれ自心を以て自心を見る吾瞳を以て吾瞳を見るより近き事には侍らずや深き事とな恐れ給ひそ九淵の潭の底千尋の海の中なる物を見給へ聞給へと云にこそ深き事とは恐るべけれ吾心を以て吾心を見る吾鼻を以て吾鼻を嗅より近き事には侍らずや世は末世なれども法は更々末世ならず末世なりとて打捨顧み給はずば寶の山に人ながら自ら飢凍を

遠 羅 天 釜

苦しむが如し末世には去事は及ばぬ事とな恐れ給ひぞ遠くは惠心院の僧都近くは赤澤の即往山城の圓忍何れも稱名の力に依て右の素懷を遂給ひたるぞかし法然上人も此望は深くおわしけれども先達なき故に翼短ふして長空に翔らざる心地なりと宣ひき末法澆季の險にや近代悪き風俗起りて出家も在家も見習ひ聞習ひになりて今時妙法の佛心なごを見んと計るは鰻が木にのぼらんとする心地なるぞとて關と一生を過行事淺ましき心ばへならずや是は左ながら過分の田地を譲れたりし百姓の子共數多在べきに其内一人軟弱不肖にて然も口利て小黠しけなるが曰く今時吾々風情の柔者共が先祖昔の人々の眞似美して農業耕作なごして大勢の妻子眷

遠 羅 天 釜

屬なご養育せんと計るは及びもなき事なりそれは左な
 がら家鵝が鷹の真似して鶴と組で落んと羽つくろいす
 るが如く跛龍の鯉魚の真似して瀧上りせんとて頭さし
 伸るに似たる事ぞ片腹こそ痛けれ左しもて行たらんに
 は必ず鎌にて水をなん呑べきぞ存じもよらぬ事なるぞ
 とよつもりても見よや和殿原や我等如きの疲孩子者ど
 もが芝野を見るが如くなる草生茂りたる田地を草刈切
 立耕し水載鉏上種子かし早苗し植つけ耘り刈干こぎあ
 げ糠すり縄ない菰あみあげ高あぐらして詠め見んずる
 事あだや通途にて送らるべき事かはそれは昔物語なる
 ぞあらぬ様なる端立なるぞや夫よりは安々と扱入袖し
 て世渉るすべはある事ぞやかなたこなたあるさても五

遠 羅 天 釜

日三日宛の日は送らるゝぞかし肩有て着すと云ふ事な
 く口有て食すと云ふ事なしと聞ものを殊更何某の國何
 某の侯は仁徳厚をはして我々如き者をば扶持し給ふと
 聞なるに果はそこへなん行べきぞ斯許よき事のあるに
 なに歎く事の有べき手足をなん動かして自力にて口過
 んとかゝるは又なき癖事なるぞ心ばかりいなしそ初よ
 り下手に組がよきぞ働だてなしそかせぎ振見するな一
 二枚ある古着も脱すて菰をなん被りて我々は告る方も
 なく居ご立ごに迷ひたる貧窮下賤の者に侍り哀れ助け
 給ひてよと打泣く往たらんに慈悲深き世の中なるも
 のをなご口一つばかりすぎ兼る事のあるべき少しも疑
 ふ心なくて兎せよ角せよと教へられて悦び勇て誰々も

遠 羅 天 釜

兼てより斯かなん思おもつる事よとて生れもつかぬ貧者に成て一生を送るに似たり此等の輩を自暴自棄の人と云臨濟大師は甘作アマナラテナル下劣人と呵責せられたり是れは左ながら魚の水中にありながら我等風情にて水など見んと計るは及びもなき事なりと歎なげき鳥の長空を翔りながら今時長空などを見んと計るは存じもよらぬ望みなりと悲むに似たり殊にしらず十方法界の中真如ならざる國土なく妙法ならざる衆生なき事を惜むべし唯心の妙法寂光淨土のまつたいに住ながら生前には娑婆なりと偏執し衆生なりと妄想し死後には地獄なりと見錯り無間なりと泣な悲む事皆是目前に充溢みちあふたる妙法の佛心前後に澄た湛たたる法性をば及およびもなき事なり存じもよらぬ望みなり

遠 羅 天 釜

とて打棄筋なき妄想情識の料簡を頼みて空く暮せるより起る事なり惜みても惜むべきは三界無比の妙法醍醐上味の經典なれども教への如く修行する人なき故に文車くるまに稠載しゆざいたる世の並々の書籍と共にあり甲斐もなくやみくも朽果穢土淨刹と見違ひ三塗六趣と思ひ成事歎の中の歎ならずや問教への如くとは如何なる教へをか指や四安樂の法門か五種の法師の行持か曰然いはしかず方便品に謂ゆる開佛知見道故出現於世の本文經中の眼目なり番々出世の如來無量恒沙の法を説給へども何れも一切衆生に佛知見を開かしめん爲なり然らば佛知見の望なく如何なる法を行じたりとも諸佛の本懐に契事は努々これ有べからず開佛知見とは一心の妙法を發明する

遠 羅 天 釜

事なり悲みても悲むべきは今末世澆季の世の中なれば
 一心の妙法の沙汰はすたれ果て思ひくの有様なりた
 まく有に似たるも此頃は皆々教へ事になりて云甲斐
 もなき風情なり大日經にも如實知自心と説給ひたるも
 のを顧る人さるなけれ法華經の教に隨はず妙法は何地
 に有もしらでうろくとして西ぞ東ぞとて混さわぎに
 騒廻りて佛道なりとて月日を送るは譬へば此に大福長
 者あらんに初め多少の艱難を経て限りもなき田地を切
 開きて備等も此田地を耕して我如く大福長者になれと
 て大勢の子供に優劣もなく過分の田地を譲與へたりし
 に父の教へに隨はずして何れも他國に流浪し人の門戸
 に傍乞食するもあり我は鏡とぎなりとて瓦を把て磨行

遠 羅 天 釜

もあり粟稗の鳥を追てすくみ居もあり長者の子なりと
 て自身は乞食非人の體にて亂りに人を輕しむるもあり
 田畑の帳面ばかり毎日繰かへして田畑の有處も知ぬも
 あり帳面さねあれば恐るゝ事はなきぞとて恣に悪行を
 行するもあり我は長者の作法を知たりとて飢渴て作法
 ばかりを行するもあり田畑の有處もしらで晝夜に田畑
 くと叫もあり田地の廣大なるを少し許り見付て大橋
 慢して嬉酒食肉心に任せて亂行なるもありて長者の心
 に契たる子は一人もなきが如し田地とは一心の妙法を
 指なり帳面とは諸經論を云なり人の門戸に傍て乞食す
 るとはかの開佛知見の大事は自身艱難刻苦して冷暖自
 知する事なるを末世になりては人の教へを受て正體も

遠 羅 天 釜

なき事を聞覺へて是を大悟とする事なりこれは法華經の中の窮子ならずや方等部にては四果の聖者をさへ二乗凡夫と呵責し給ひしものを人々の教へ給ふ通りの埒もなくたわいもなく繩にもかづらにもかゝらぬ事ならば何しに佛は六年まで雪山に閉籠て皮骨連立し絲を以て瓦を編立たる如く瘦衰へ蘆すゝきの膝を突貫て臂まで穿ち抜たるをも覺へ給はず目のあたり雷の落て牛馬を打殺したるをも御覺へましまさぬ程苦吟し給ひて初めて佛知見を開き給ひたるは如何なる事ぞや蓋し佛道も上古は大ひに難く今時は大ひに易しとするか且蘿蔔を煨し芋栗を煮るが如く初めは硬く後には軟かなるものとするが今時の易きが是ならば古への難きは非なら

遠 羅 天 釜

ん古への難きが是ならば今時の易きは非ならん古への難きは苦吟する事は甚だ苦吟す纒かに發轉する時は忽ち賢聖佛祖たり那邊を透過し今時を透過して毫釐も觸着すれば電轉じ星飛ぶ今時の易きは殊勝なる事は甚だ殊勝なり望み見る時は畫圖の賢聖僧の如し纒かに發轉する時は依然として困魚箔に止り跛鼈甕裏に落つ今時を透らず那邊を透らず抄着すれば瞎驢氷稜に上る今時の易きを取んか古への難きを取んか如何に末世なればとていひ甲斐もなき有様なり古人も末々は禪法も正體もなく成果へきを知給ひけるにや妙心を瘡紙に求め正法を口談に付すとは兼て悲み云置れたるなるべし此事もし紙授口傳にて濟べくは神光の臂を断ち玄沙の足を

遠 羅 天 釜

傷そなひ法ほう心しんは頭かぶ腫はれ法ほう燈とうの涙なみだを落おす事ことはこれあるべからず
 人は兎うさぎもあれ角かどもあれ我われは是非しぜいく晝ひる夜よるに間まもなく首くび
 題だいを唱となへ給たまはゞ雪山せきざんには入いず頭こゝろは腫はれすとも決けつ定てい必ひつ定てい自じ
 性じやうの妙めう法ほう蓮れん華わは麗うるはしく開ひらけ侍まるべしたゞ肝かん要やうは自じ心しんの
 妙めう法ほうを見み届とけずば置おまじきぞと望のぞみ深ふかき程ほど貴たかき事ことは無なし
 事ことなり如ごとく來き世よ尊そんも自じ心しんの妙めう法ほうを見み届とけ給たまはゞりし間まは
 流りゅう轉てん常じやう没ぼつの凡ぼん夫ぶに少すくしも違たがひままさで生な死し往わう來らいし給たまひ
 き末すえ後ご雪ゆき山ざんに於おて自じ心しんの妙めう法ほうを見み付つ給たまひて初はめて正しやう覺かく
 を成じやう就じゆし給たまふ事ことなり瓦かはらを磨こくとは八はつ識し賴らい耶やの無な分ぶん別べつ識し
 を認たづて本ほん來らいの面めん目めなりと合あ點てんして妄まが念ねんさへ無なれば其その迹あと
 は鏡かがみの如ごとくなる佛ぶつ心しんぞ只ただ鏡かがみの萬ま境きやうを寫うつして鴉あは黒くろく鷲じゆ

遠 羅 天 釜

は白しろく柳やなぎは緑きぬぎに花はなは紅くわいに少すくしも錯さくらす照てせども毫ご釐りも
 迹あとを留とどぬ如ごとく時とき々に勤つとめて拂はら拭しせよと教おしへられて晝ひる夜よる
 に妄まが念ねんを拂はらふは瓦かはらを磨こき粟あは稗ひの鳥とりを逐およに同おなじ是こゝろを識し神しん
 を認たづむと云いふ山さん河が大だい地ちを照て破はする光くわう明めいの發はする事ことはな
 き事ことなり此この類るいの修しゆ行ぎやうは昔むかしより大だい唐たうにも間ま多おほき事ことなり南なん
 嶽たつ大だい師しの馬ば祖その菴あん前ぜんにて瓦かはらを磨こき給たまふも馬ば祖そに此この意いを
 知ししめん爲なり去さるに依よて長ちやう沙さ大だい師しの偈ぎに曰いは學がく道だう之の人ひと
 不ふ識し真ま只ただ爲なり從したがり前ぜん認たづ識し神しん無な量りやう劫げつ來らい生じやう死し本ほん癡ち人にん喚ま作さく本ほん來らい人にん
 と是こゝろ故ゆゑに慈じ明めい真ま淨じやう息そく耕かう大だい慧ゑ等とうの祖そ師し齒はを切きつて舐な排はいし
 て親おん切せつを盡じんされし事ことなり其その外ほかの諸しよ師しの有あ様さまは逐お一いつ舉きよす
 るに及およばず大だい凡ぼん三さん世せ十じゆ方ぽうのあひだ間まに見み性じやうせざるの佛ぶつ祖そなく
 見み性じやうせざるの賢けん聖せいはなき事ことなり是こゝろ萬ま古こ不ふ易やくのおほ綱かうなり

遠 羅 天 釜

見性とは法華眞の面目を見届る事なり此望なくて種々の事して佛法なりと心得るは船頭もなき大船に幼童多く競ひ乗て何地へ寄べき湊もしらで彼方へ漕が好ぞ此方へ漕が好ぞとて思ひくく櫓櫓推たて昨日は東の方へ湖に隨て漕漂ひ今日は西の方へ沙に隨て漕漂ひ終に海中を出る事能ず其船中へ案内しりたる船頭忽ち打乗磁石を見定め楫を把時は一日の内にも思ふ湊へ着事なり船頭とは見性の志行なり磁石とは正法の指南なり楫とは平生の志行なり如何して妙法の湊へは漕入べきぞとならば一切の行人は佛を求め祖を求め涅槃を求め淨土を求めて外へくく漕出る風情なり故に轉求れば轉遠く轉尋ぬれば轉遙なり眞正妙法の行者は即ち然らず

遠 羅 天 釜

自己本有の妙法は如何なる物ぞと推究て佛を求めず祖を求めず彼妙法は内に在とやせん外にありとやせん内外中間にありや又青黄赤白なりや是非くく一回見届けずは置まじきぞと十二時中一切處に於て間斷なく猛く甲斐くしき氣槩を推立流石の者が思ひ立たる事を遂すや置べき仕果すやあるべきと寝ても覺ても起ても居ても捨をかす晝夜に點檢して或時は打返して恁麼に尋る底は何物ぞ何物ぞと尋る備は是阿誰と進み入是を獅子人を咬の法と云心の妙法は如何くくとばかり尋ねもて行を韓獪塊を逐と云唯兔にも角にも萬事を放下して無念無心になりて南無妙法蓮經華くく唱へ給ふべし此外別に有難き法理の老僧が書送るべき事ありと思さ

ば上もなき錯りにてこれあるべく候南無妙法蓮華經
延享第四丁卯曆仲冬廿五日

沙羅樹下老衲書

右管々布長書披覽も六箇布侍るべけれど此れを
序でに菴居の人々も一覽せらるべければ法施にも
なれがしの心にて書續けたるにて候至極の旨は自
心の妙法を是非く見届くべしと思して絶間もな
く首題を唱へ給へとの心にて候

老夫裁此草書畢竊看讀時有一僧在予傍是予舊友僧也讀
到法華真面目處長吁曰師復掃止啼金葉那予勃如曰何謂
哉爾以吾草書爲黃葉乎是金也非黃葉矣如此書汲法華本
文大意書爾指以爲黃葉非是謗法華者哉誹謗正法罪累無

所容懺悔爾指那處乎以爲黃葉耶僧低頭曰今近遠住菴諸
子各懷英豪才忘枯淡坐拋軀命修借舊宅潛廢社十年五歲
者甘師惡毒苦乳不忍分離者也今歲狂浪洗田園不留粒米
民家各欲携妻孥竊往佗方予杳嗟悼已哉鶴林住菴緇侶無
一箇留錫禪苑荒蕪不可過之矣近有一僧曰探飽煖慕鬧熱
朝秦暮楚底庸常下劣族閣不論眞實辨道求透過底舊參上
士者一箇不去其精進勇銳十陪前月五箇爲黨十箇結伴此
水邊彼林下不食不寢者或五日或十日盡言此是守凶年飢
歲佛法格式叢社古實也瘦者如喪考妣人衰者似羅重痾人
凍餒困苦鬼神亦可落淚波旬亦可合掌今時諸方叢林佛閣
高貴僧舍嚴麗二輪並轉四事重備而不顧何心哉在貧困飢
凍窮餓交煎巷耳所聞師惡言苦罵口所投佗粟麥糝糠可心

底事一滴亦無矣然彼亦非所以無所容五尺身輩盡是今時
叢林頭角上士也只各急求透過其餘總不願者也予聞得大
歡踊曰且喜佛法大可得人時也師亦宜提起向上鉗鎚求實
參實悟上士涉隨佗意說以第二機接人大損人必妨佗悟門
有蟲氣息底漢子亦不能得如予三十年前依師提携精鍊刻
苦喫盡多少艱辛見得本有佛性徹了法華真面目於一念三
千妙理三諦即一奧義毫釐無疑惑師亦以吾為見得法華真
面目許可矣予亦心竊謂天下既定矣近頃聞師評唱碧巖錄
恰如田夫杏立階下聞中書堂上諸君公議如瞽者張眸窺湘
水佳景似聾者欲耳聞洞庭雅樂於此大失力慚汗滴臉傷淚
滿胸從前苦修似不立尺寸功者初謂吾得力與師一般今以
予擬師如疲辛指駿驥稱吾父似跛鼈指神龍道吾師心竊以

師為賺吾者悞悞不樂師今又書法華真面目事一見怨恨乍
發故言又是包止啼金葉不亦宜乎住菴諸子亦今徃々有此
歎息况師亦指諸人辛勤所得稱棺木裏禪焉予曰定有其事
嗟子來進備見老松秀丘壑麼枝柯衝九霄根盤徹三泉上有
百尺絲下有千歲苔勢如蛟龍欲攫霧上長空下有青々一寸
松猶戴甲子立指可拔爪可截指此二物問佗曰是什麼佗必
言共是松也唯在積歲月養與不養而已莫言歲月是可也備
若守一箇死棺材作鬼家活計了縱雖積重驢年堪作甚麼用
矣古有張氏子兄稱張五弟曰張六兄弟裹糧遠徃百里中路
各拾得金一錠大歡踊而後索居互不知死生者蓋三十餘歲
于此矣六思其兄事尋逐四方認得其兄所在杏來相訪望其
兄室水磨列鳴轂車轟過牛馬列槽櫪家鵝滿溝瀆簫竽遠流

歌聲抑揚有佳賓，往有高官來。六震恐不能直越門，闔折腰屈膝。畏々出名刺，雙童來迎。容貌秀麗，態度高雅，踟躕從進。屋壁麗堂宇，美如入康藝室。似上石奴堂，魂蕩股戰，不知所坐。少焉張五被婢，妾扶挑錦帳，出侍女圍羅綺，羅驚魂繡紋奪目。金爐吐千花芳，玉佩流百禽音，頭穿紅羅帽，肩掛紫錦袍，坐綠熊茵。凭紫檀机，奢眸如虎，抗肩如鷲。六一見不覺，頭到地，身體委縮啼泣不休，不能舉頭。正視張五徐徐告曰：吾弟何來晚矣！胡為其如此？郎當哉！六拭淚畏々問曰：吾兄今仕何侯？受誰家恩願？如此尊大如此富貴哉！張五曰：我非所以為人臣者，我非所以受人恩願之者。我者昔者拾金者也。六曰：兄所拾其數為幾？百筐金哉！大車重積者乎？巨船租載者乎？天所墜乎？地所埋乎？遺忘底為誰耶？張五曰：不然。三十年前我與備於何某路上所拾

者也。六曰：怪哉！纔一錠金而得此富貴也。六於此乎大惑矣。恐候白黑之流亞乎？盜蹠之部屬乎？若果而然者，我疾辭出，出謀遁九族，難豈坐而待死亡者哉！張五聞々笑曰：備向所拾者，今其何處在？庶為博奕失者乎？且羅花酒惑者乎？六曰：宜哉！見我郎落我兄甚怪也。願避左右，吾有一言密々告之。張五纔日擊妻，孥皆退。六畏々近進曰：吾豈博奕及願花柳者乎？吾貧不失金，吾瘦為護金。吾兄向不言哉，爾能保護莫亂費用，吾以不負吾兄命為足者也。張六既自得彼金，十重包裹，尊重保護如懷和珠，似持夜光，行亦携歸，亦携釜，莫恐盜竊。難三十年未嘗放心眠，恐人窺知，絕友避交，故為貧窶人，肩掛百緞，鶉衣首穿千補鳥帽，人皆棄吾，不願吾，却以此為幸。恐費金盡，妻孥亦不養，常獨子而往，獨子歸，常竄無人緣處，尋舊舍臥，求破廟，眠終不

遠羅天釜

入客店宿曾無糟糠飽常傍人門戶乞久立不與希歌而已彼
 金今在此願左右再三飽窺無人頸弛垢膩破布囊再三推戴
 解十重包裹願左右出金示之曰兄拾于今在麼願出紹舊交
 張五笑曰三十年前別爾不久而打失彼金了也六勃如而熟
 見張五面且願吾身曰兄失也吾護也吾護也兄失也失兄者
 如是尊大也護吾如此貧凍也或張目或攢額板齒咬唇沈吟
 不休少焉曰護非而窮餓棄是而豐饒乎雖後我亦棄乎願聞
 棄之之道張五大笑曰爾所拾金而劣黃葉非不能潤身却窮
 餓其身傷賊其心腸若包黃葉來往不重不須現貧窶在茅舍
 裏養妻子高枕睡臥而已爾所護所以棄之之道也我所棄所
 以護之之道也我初得金別爾後行揚州以金輕於黃葉放大
 買鹽賣鹽不足束其息大買綿絮賣綿不足放其息大買麻絲

遠羅天釜

賣麻絲不足放其息大買粟米蔬果魚肉放人於吳楚蜀魏間
 山海珍水陸美普載聚開大店八九臣商三百人鐘鳴鼎食大
 凡握錢入張五門者糟糠菜薪鹽醋酒醬無不鬻於此積財巨
 萬陝陶朱不屑狗頓倉庫廩庾並薨列立求千頃膏腴地買得
 松杉山梓楠苑數十今占居於此處是所以吾向輕於黃葉棄
 金之道也六立再拜曰我兄萬歲欽冀無疾病乎兄捨似捨久
 勤護小人護似護久勤捨捨護互勤利害大異寔知入智者手
 則黃葉亦真金也落愚者手則真金亦黃葉也自恨三十年惱
 心肝盡氣力實不立方寸功果放聲哀號參學亦如斯初爾所
 得即是人人本具性唯有一乘法華真面目也我所得亦人々
 本具性唯有一乘法華真面目也此言見性是性初從見道終
 到種智成就毫釐無變遷如一錠大冶精金故言初發心時便

成正覺教家此言十住初住轉有最後重關誰知祖庭猶隔天涯在焉往々擔此一片所見乃曰我今既向朕兆未發以前佛祖未興之處立者裡全無生死無涅槃無煩惱無菩提一代藏經拭不淨故紙菩薩羅漢如廁穢參禪學道閑妄想古則公案眼中翳者裡無今時無那邊不求佛不求祖饑餓困眠有何所欠少者般見解佛祖亦不得醫只日日求安閑處今日只恁麼死獍狙地去明日亦恁麼死獍狙地去縱恁麼歷無量劫數依然只是一箇死獍狙地作什麼用如來此比疥癩野干身蒼蠅呵爲蚯蚓智淨名曰蕉芽敗種部類長沙此言百尺竿頭不動人臨濟言湛々黑暗深坑是言見地不脫所謂機不離位墮在毒海者也只執一片所見揩磨淨盡錯一生了如彼張六懷一錠金困倦逼迫去死十分慈明黃龍真淨晦堂息耕大惠諸老

盡力攘斥救不得矣老夫初七八歲時隨母入教院聞僧講摩訶止觀中地獄說相其僧有辯才演叫喚無間焦熱紅蓮苦境恰如目見一堂縑素悉寒毛卓豎歸來計子平生殺業如無身所置動止悚然肌膚栗々竊把普門品與大悲神咒晝夜讀誦一日共母入浴母求湯熱使婢頻添薪浸々火氣衝肌膚盤大鳴乍想念地獄事故聲悲號哀聲動四隣從此竊求出家父母不許常行寺誦經讀書十五歲而出家自誓曰願不見肉身而火不能燒水不能溺底得力死不休晝夜孜孜誦經作禮於病惱或針灸間點檢其痛痒無與平生異心甚不歡曰我既背父母出家未見方寸功果我聞法華一代經王而鬼神亦欽往々幽冥苦界人託人求救必言法華熟謂他人讀誦且拔其苦患况自身讀誦且又經中必有甚深妙義於此親把法華經窮見

除唯有一乘諸法寂滅文餘皆因緣譬喻說也此經若有者般
 功德六經諸史百家書亦可有功德豈特此經云哉大失懷素
 實十六歲之時也十九因讀正宗贊巖頭和尚末後為盜賊被
 害叫聲徹三里外予謂徹甚徹如何不免盜賊戈矛嗟如巖頭
 和尚者僧中麟鳳佛海蛟龍且然也死後豈得免獄奴杖子哉
 若果而爾參禪學道何益焉佛法恁麼虛誕也悔者以身投此
 妖邪除裏今夫可如何於此大懊惱不食三日永絕望於佛法
 見佛像經卷如泥土專讀俗典弄詩文少忘憂愁二十二而往
 若州交虛堂勝會乍省覺其後在豫州讀佛祖三經大猛省晝
 夜提起無字片時不休只愁不得純一無雜打成一片又愁不
 能寤寐恒一二十四歲春在越英巖僧舍苦吟晝夜不眠寢食
 共忘忽然大疑現前如萬里一條層冰裏凍殺胸裡分外清潔

而進不得退不得癡々呆々只有無字而已雖陪講筵聞師評
 唱如數十步外而聞堂上議論或如在空中行如此者數日乍
 一夜聽鐘聲發轉如擲碎冰盤似推倒玉樓忽然蘇息來自身
 直是岩頭和尚貫通三世不損毫毛從前疑惑盡底冰消高聲
 叫曰也大奇也大奇無生死可出無菩提可求傳燈千七百箇
 葛藤不足消一捏於此慢憶山聳憐心潮湧心竊謂二三百
 來如予痛快打發底不可有之荷一段所見直行信陽謁正受
 老師演所見呈偈師左手握言偈曰者箇是學得底那箇是見
 得底上云仲右手予曰若有見得底可呈師須吐却作嘔吐聲師云
 趙州無字作麼生見予曰無字有甚麼所著手脚師以指拗予
 鼻曰多少着手脚了也予擬議師大笑云此守藏窮鬼子予不
 顧師曰爾恁麼為足那予曰有甚麼不足處師舉南泉遷化話

予掩耳出師曰閣梨予回頭師曰此守藏窮鬼子從此大凡每見予盡言守藏窮鬼子一夕師納涼坐檐端予亦呈偈師曰妄想情解子高聲叫曰妄想情解師即捉住予噴拳二三十終突落堂下時五月四日夜霖雨後也予在泥土上假臥氣息共盡去死十分動亦不得師在檐上呵々大笑少焉蘇息起來作禮通身汗流師高聲叫曰此守藏窮鬼子於此親參南泉遷化話寢食共廢一日有些省覺入室種種下語不契只云守藏窮鬼子予心竊謂辭去往佗方一日往城下托鉢有狂人欲把茗帚打予予不覺打破南泉遷化話其餘數段因緣疎山壽塔話大惠荷葉團々頌自謂盡打發歸來演所見師總不可否只微微笑而已從此休言守藏窮鬼子其後省悟大喜者三兩回所恨語路有到不到平生如燈影裏行歸來侍病於如何老人

一日看讀息耕老師送南浦和尚偈相送當門有修竹爲君葉々起清風大歡喜如獲夜光於暗路不覺高聲曰我今日始入得語言三昧立禮拜矣其後行脚路歷勢陽一日衝大雨行雨水到膝廓然深入得荷葉團々句中歡喜不得立放身倒水中忘却起立腰包皆浸行人怪立扶起予呵々大笑人皆以爲狂妄其冬在泉州信田僧堂夜坐聽雪有得所翌年在濃東靈松僧堂經行忽然打失從前多少所得大歡喜三十二歲住此破院一夜夢吾母以紫絹衣附予提起覺兩袖甚重探之各有一面古鏡經可五六寸右手者光輝透徹心肝自心及山河大地如澄潭無底左手者全面無一點光耀其面如新鍋未觸火氣者忽然覺左邊光輝勝右邊百千億倍從此見萬物如見自己而初了知如來目見佛性後來因取碧巖錄讀與從前所見大

異其後一夜把法華經讀乍徹見法華圓頓真正奧義打破最
 初一團疑惑覺得從上多少悟解了知大錯了不覺放聲啼泣
 須知參禪甚不容易今雖放蕩老懶到毫釐無所可取自覺四
 十年終不空送却光陰非是所以張五在揚州放金艱辛者哉
 予亦效吾予磨一且所見楷磨淨盡錯一生了與彼張六死守
 一錠金窮餓其身困煎其心肝何得異天竺此言二乘長者窮
 子漢土此言默照邪禪流類是皆不知菩薩威儀不明佛國土
 因緣之所致也今時往々擔一片空理會佛會祖會古則公案
 了盡言如棒如陀羅尼如一喝大可笑勉旃諸子佛道深遠須
 知如海轉入轉深似山轉上轉高若欲知自家得力當否如何
 先須參南泉遷化話昔三聖教秀上座去問長沙岑禪師南泉
 遷化後作麼生沙云石頭爲沙彌時見六祖秀云不問爲沙彌

時南泉遷化後作麼生沙云使伊尋思去秀云和尚雖有千尺
 寒松且無抽條筍長沙無語秀歸舉示三聖三聖不覺吐舌曰
 勝臨濟七步此語若得見得分明許懶得小分相應何故無人
 獨語者其賤如鼠以何爲驗鼓牙三下合掌曰漸

白隱禪師遠羅天釜續集

答念佛與公案優劣如何之問書

先書に正念工夫相續不斷の助けに念佛せよと勸むる者も是有り如何ん趙州の無字と一般なりとせんか將又別に子細有りやとの御尋ね叮嚀なる思し召しに候る人を殺すに刀を以てする有り鎗を以てする有り一般なりとやせんか將又別に子細有りやと問はん如何か答へ玉ふべきや刀鎗器は異なりと云へども其殺すに到つては豈に兩般有んや去る程に忠信は碁盤を振上げて敵を追い篠塚は船梁を引きはづして人を打ち呂后は鳩酒を執つ

て如意を毒害し立武は琴絃を解いて妓女を殺し關羽は龍刀を提げ張飛は蛇棒を取る刀鎗は兩般なけれども只執る人の利鈍と真偽との兩般に在るらくのみ學道も亦然り或は定坐し或は誦經し或は諷咒し或は念佛し努め力めて前後際斷の處に到つて無明の暗窟を踏翻し五欲の凶賊を逼殺し大圓鏡光を擊碎し四智圓明の正位を透過し大事を成辨するに到つては行持は縦い品な異なれどもその所證に到つては豈兩般有んや茲に人あり力量骨格互ひに相同じ各各堅甲利兵を執つて相戦はんに一人は志念堅からず或ひは疑い或ひは恐れ或ひは戦はんとし或ひは走らんとして死生決せず進退定まらず眼目定動し步驟正しからずしごろに成て相進まん一人は

危亡を顧みず強弱を觀せず一身を必死の地に擲着し目を居へ齒を切つて大精神を震つて斷斷として相進まば此兩箇の勝敗は掌ろを見るが如けん十騎にして千騎に對し百騎にして萬騎に對すといへども百戰百勝目前に分明なり譬へば兩陣相對せんに一方は金銀を以て募り備いたる雜兵十萬又一方は仁恕を以て志を合せ忠義を以て鍊り鍛たる精兵一千此千騎を放つて彼十萬に當てんに惡虎の群羊を驅るが如けん是他なし只大將の賢と不肖とに在らくのみ豈に勢の多少器の長短に依らんや工夫も亦然り一人有り常に趙州の無の字を舉揚じ一人有り常に專唱稱名せんに無の字を舉する人は工夫純ならず志念堅からずんば縦い舉して十年二十年を経ると

遠 羅 天 釜

も何の利益か有ん稱名の行者は打成一片に稱名し純一無雜に專唱して穢土を觀せず淨土を求めず一氣に進んで退かずんば五日三日乃至十日を待すして三昧發得し佛智煥發して立地に往生の大事を決定せん往生とは何をか云や畢竟見性の一着なり經に曰く我國に生れんと十念唱へたらん人の我國に往生せずんば正覺を取らじと誓ひ玉ふ我が國とは何れの處ぞ目前歴歴たる底の本具の自性に非ずや見性の人に非ずんばたやすく見る事能はじ若然らずんば今時諸方淨業の人人日日にとなへ唱へて千念萬念千億萬念す然ふして往生の大事を決定する底は半箇も亦無し知らず無量壽尊正覺を取る事を廢し玉はんか殊に知らず一念直に是往生極樂國豈に十

遠 羅 天 釜

聲を待んや此故に佛の宣玉はく勇猛の衆生の爲には成佛一念に在り懈怠の衆生の爲には涅槃三祇に亘ると説玉へり若無の字と稱名と兩般の看を成ば須らく知るべし盡く是邪魔外道の種族なる事を悲む所は今時淨業の行者往往に諸佛の本志を知らず西方に佛在りとのみ信じて西方は自己の心源なりと云事を知らず念佛の功課に依て虚空を飛過して死後西方へ行んとのみ覺悟す一生苦吟して往生の素懷を遂る事能はず殊に知らず十方佛土中唯一乘法なる事を此故に言ふ佛身法界に充滿して普く一切群生の前に現すと若佛西方にのみおわさば一切群生の前に現じ玉ふ事能はじ若一切群生の前に現せば特西方に限るべからず悲ひ哉如來清淨の眞身は

遠 羅 天 釜

煥爛として目前に分明なる事掌を見るが如くなれども
 惠眼既に盲いたる故に都て是を見上つる事能はず豈に
 言はずや光明遍照十方世界と蓋し光明と世界と兩般の
 會を成し玉ふべからず悟る則んば十方世界草木國土を
 全ふして直に是如來清淨光明の眞身とし迷ふ則んは如
 來清淨光明の眞身を全ふして錯つて十方世界草木國土
 とす此故に經に曰く若し色を以て我を見音聲を以て我
 を求めば此の人邪道を行じて如來を見上つる事能はず
 と眞正淨業の行者は即ち然らず生を觀せず死を觀せず
 心失念せず心顛倒せずとなへ唱へて一心不亂の田地に
 到つて忽然として大事現前し往生決定す此の人を指て
 眞正見性の人とす自身直に是六十萬億那由佗恒河沙由

遠 羅 天 釜

旬の彌陀七重の寶樹八功德池心上に昭昭として目前に
 煥燦たり山河大地萬象森羅盡く是れ微妙希有の莊嚴海
 なる事を徹見す專唱稱名一念不生放身捨命の端的を往
 と云三昧發得眞智現前の當位を生と云如上の眞理煥然
 として當處湛然一毫をも隔てず涌出するを來迎とす來
 迎往生直下不二見性の當體なり元祿の頃をい二人の
 淨業者あり一人を圓愍と云ひ一人りを圓愚と云ふ二人
 志を同ふして專唱怠る事なし圓愍は山城の人も唱念純
 一果して一心不亂の境致に到つて忽然として三昧發得
 し往生の大事を決定す此に於て遠の初山に上つて獨湛
 老人に謁す湛問ふ爾ちは是何れの處の人ぞ愍曰く山城
 湛云く何れの宗をか業とす愍曰く淨業湛云く彌陀如來

年多少ぞ恕曰く某甲と同年湛云く彌陀と同年湛云く即今何れの處にか在恕即ち左手を握て少く揚ぐ湛驚て曰く彌陀は是真箇淨業の人也と圓愚も亦久しからずして三昧發得し大事決定す元祿の初め豆州の赤澤なる處に行者あり即往と云ふ彼れ亦た稱名の力に依て大ひに得力あり予向きに此兩三箇の傳を記す逐一枚擧するに暇あらず是即ち專唱稱名得力の現證なり須らく知へし話頭も稱名も總に是開佛知見道の助因なる事を開佛知見は諸佛出世の本志なり後來且く方便を設けて往生と名つけ見性と云豈にそれ兩般有んや是等の意を見徹せざる故に禪者は淨業の行者を見ては無智昏愚の凡夫見性の大事有る事を知らず妄りに唱へて

白晝に十萬億の刹土を飛過して極樂國土に往んとす恰かも跛鼈の身づくろいして唐土へ飛んとするが如し殊に知らず十萬億土は十惡八邪佛智開明の曉き十惡八邪乍ち氷消して當處即ち極樂國土なる事を知らずと云て輕賤す淨業の行人は禪門の諸子を見ては如來他力の大誓を信せず自力貢高の我慢を主張し大悟して生死を生きんとす片腹痛き風情ならずや末代下根の我々が及ぶべき事かは左ながら家鵝の朝鮮へ翔つて鷹と羽節を較べんと羽づくろいするに似たりと慢り狹す法華經の行者は乃ち曰く吾が經の如きは三世の諸佛出世の本懷一切の如來成道の直路なる醍醐上味の妙經を指し置き稱名參禪何の用ぞ剩さへ妙經轉讀の法師を見ては唯有一乘

の圓解を發せず諸法實相の知見を開かず只毎日わわとのみ叫びて偏へに春の蛙の畔にわめくに似たりなど舌長き雜言如阿梨樹枝の金文も顧りみざる愚人皆是邪魔外道の所行なりと嘔り恨む殊に知らず法華は阿含方等四味の階漸を慕過し開佛知見の至要を演此故に本文に曰く開佛知見道故出現於世と正に知るべし圓解の煥發を以て出世の本懐とする事を然らば則ち參禪も念佛も及び看經誦經をさへに盡く是見道の輔助にして行路の人の杖の如くなる事を杖に藜杖あり竹杖あり藜竹品な異なりといへども其行を扶くるに至つては一なり言事なかれ藜は可にして竹は不可なりと若其れ行客心屈し體疲れて起事能はずば藜杖竹杖何の用を成にか堪んや

參禪も亦然り只肝心は行者勇猛精進の一念子に在らくのみ云ふ事なかれ話頭是にして稱名不是なりと行人若し勇銳の志し無くんば稱名も話頭も瞽者の眼鏡法師の櫛貯はへ果たして是何の用ぞ茲に數百人あらんに帝都へ行ん事を願ふて各々糧を包んで出づ先達好らずして錯つて遠境邊土虎狼充滿の廣野に留つて徒に日々杖の短長を争そひ行装の可否を論じ路費の多少を計つて杖々とのみ唱ふるあり路費路費とのみ叫ぶあり終に一步をも進む事を知らず空しく歳月を送つて歳衰へ體疲れて果は虎狼の爲に獲られ遠路邊境の閑神野鬼と成り果るに似たり終に帝都に到る事得ず只肝心は杖子を選択ばず行装を論せず一氣に進んで退かず速かに京師に到

遠 羅 天 釜

るを以て賢なりとす若し今時に効つて生前に佛力を頼んで死後に西方に往んとならば一生三昧發得往生決定する事能はじ况んや真正見性の大事に於てをや去る程に眞珠菴主の歌に行く水に數かくよりも慕なきは佛を頼む人の行末へと蓋し斯言へばとて淨業を嫌ひ稱名を狭するにし非ず正念工夫相續不斷見性了義の扶けにとならば稱名はさて置き粉拽歌にても唱へ玉ふべし相構へて見性の秘訣を捨て置き專唱の功勳に酬へて佛にならんと計り玉ふべからず其子細は譬へば茲に萬石の大船あらんに思ふ儘に艤いし順風を七合に受て舟歌を張り櫓拍子を揃へて水主楫取心を合せて千尋の浪を押し切り八重の鹽路を漕抜んと毎日勇み進むと云へども纜

遠 羅 天 釜

を切て放たざらん限りは中々浩波を渉る事能はず徒らに日々氣力を勞すといへども元の湊に在らくのみ願ふに纜の金緒なれども大船を留むるに至て萬夫も及ぶべからず學道も亦然り譬へば茲に一個有んに宿に靈骨有つて英豪の氣を具し神俊の才を備へ剩さへ馬祖百丈を師家とし南泉長沙を同伴とし勇猛の穎氣を養なひ打成一片に進み純一無雜に修したりとも命根截斷せざらん限りは因地一下の歡喜は努々これ有べからず命根とは何をか云や無量劫來相續し來る底の無明の一念子なり天堂地獄穢土淨刹を化出し三途六趣を現成する事は皆是彼れが力に依れり夢幻空華の細念なれども見性の大事を妨ぐる事は百千の魔軍にも超へたり空華の細念と

遺 羅 天 釜

も名づけ生死の命根とも名づけ煩惱とも名づけ陰魔とも云ふ一實多名子細に看來れば畢竟我見の一法に歸せり有我に依るが故に生死有り涅槃あり煩惱あり菩提あり此故に言ふ心生すれば種々の法生じ心滅すれば種々の法滅すと又若し我相人相衆生相あらば即ち菩薩にあらずと佛け迦葉菩薩に問玉はく善男子何等の法をか修して大涅槃の法に契當する事を得る迦葉菩薩其時五戒十善十八不共六度萬行八背遮無量の法門逐一擧げて答ふれども佛け總に許可し玉はず迦葉佛けに問ふ世尊何等の法門か涅槃に契當する事を得るや佛の玉はく但無我の一法のみ涅槃に契當する事を得たりと然るに無我到無我あり人あり常に心身怯弱にして一切の人を恐れ心氣を

遺 羅 天 釜

殺して萬縁に應じて罵れども嗔らず打擲すれども管せず常に癡々呆々として一事を経ず一智を長せず我は是無我を得たりとして足れりとす此れは是一個の破飯糞泥猪の肥へ貯れて一切無智昏愚なるが如し是真正の無我にはあらず況んや專唱の力らに依て淨土へ行んと計り佛けに成らんと擬するをや行く底これ何物ぞ成する底は何物ぞ我に非ずして是什麼んぞ謂ふ事なけれ然らば則ち是斷滅の所見なりと是斷なりや是不斷なりや真正見性の上士に非ずんば輒く知る事能はじ眞正清淨の無我到契當せんと欲せば須らく峻崖に手を撒して絶後に再び蘇つて初めて四徳の眞我到挿着せん峻崖に手を撒すとは何ぞや一人あり錯つて人迹不到の處に到つて

遠羅天釜

下無底の斷岸に臨めり脚底は壁立苔滑かにして湊泊するに地なし進む事得ず退く事得ず只一個の死あるのみ
 纒かに頼む處は左手に薜蘿を捉へ右手は蔓葛にすがつて且らく懸絲の命を續ぐ忽然として兩手を放撒せば七支八離枯骨も亦た無けん學道も亦然り一則の話頭をとつて單々に參窮せば心死し意消して空蕩々虚索々萬仞の崖畔に在るが如く手脚の着べきなし去死十分胸間時々熱悶して忽然として話頭に和して心身共に打失す是を峻崖に手を撒する底の時節と云豁然として蘇息し來れば水を飲で冷暖自知する底の大歡喜あらん是を往生と名づけ見性と云只肝要は此專念の扶けに依て是非是非一回自性の本源に徹底すべきぞと勵み進み玉ふべ

遠羅天釜

し只千萬疑がひ玉ふべからず見性の外に成佛なく見性の外に淨土なき事を三界無比の大聖一切衆生の導師なりと渴仰せられさせ玉ふ十方調御の世尊如來も雪山に入て一回見性し玉はざりし以前は流轉常没の凡夫に同じく八千度の往來は歷玉ひき見性大悟の曉にこそ正覺の眉を開き玉ひける者を見性の外に成佛ありと心得見性の外に淨刹ありと心得んずる人は上もなき不覺なるべし觀世大士の生身にて渡らせ玉ふ二十八代の祖師達磨大師の如きは遙かに十萬里の鯨波を凌ひて諸經諸論に不足もなき漢土へ如來直授の佛心印を傳へんとて渡り玉ふと聞き及びにたりければ如何なる大事をか傳へ玉ふぞと人々目を拭い襟を正して渴仰し申しけるに只

遠羅天釜

見性成佛の一事をのみ授け玉ひにき破相悟性等の六門
 を設け玉ひにたれども畢竟見性の一處に收歸せり然れ
 ども衆生無量なる故に法門も又無量なり中に就て往生
 の一門は韋提希獄中の患難を救はんが爲めに假りに且
 く設け玉ふ若し往生の一事を以て佛法の至要なりとせ
 ば祖師只二三行の書を裁して漢土へ送り玉はゞ足れら
 くのみ曰く專唱稱名して淨刹に往生せよと何ぞ煩はし
 く千辛萬苦の風波を凌ぎ全身を鯨鯢の腮に懸て漢土へ
 渡り玉ふべきや如來も亦然り初めより淨飯王宮の中ち
 に空して耶輸陀羅瞿夷女等の妃嬪と共に娛樂を窮め玉
 ひ位十善に登り富み五印を有ちて末後に稱名念佛して
 淨土に往生し玉はゞ足れらくのみ何の心ぞや金輪の王

遠羅天釜

位を振り捨て苦行六年阿羅羅迦摩羅の仙人に責め使は
 れ其後ち深く雪山に入て葦蘆の股を突き貫くをも覺へ
 玉はず目のあたりへ雷の落て牛馬を打ち殺たるをも知
 り玉はぬ程深く大禪定に入り玉ひて通身瘦衰へ玉ふ事
 絲もて瓦を編たてたる如く皮骨連立せり遂に臘月八夜
 明星を一見して初めて見性大悟高聲に唱へ玉はく希有
 なる哉一切衆生如來の大智慧徳相を具すと是より山を
 出來つて頓漸半滿の教を説宣玉ふに乏き事なし此に於
 て十號具足果滿妙覺の如來と仰がれ玉ふ是彼の善慧大
 士の謂ゆる頓に心源を悟つて寶藏を開き玉ふに非ずや
 澆季末代壞劫法滅の末世といへども佛子たらん者の尊
 信すべき芳躅ならずや大凡番々出世の如來歷代傳燈の

祖師及び一切の賢聖智者高僧に至るまで其所傳の秘訣
 行持の内證を探るに盡く自性の法門を至要とす蓮如上
 人の如きも平生往生不來迎の往生と説れけるよし願ふ
 に是亦これ見性の眞理にあらずや深く海藏の底を探つ
 て五千餘卷の金文を五度びまで究め玉ひ王候より庶人
 に至るまで生身の如來の如く仰ぎ貴ばれ玉ひし法然上
 人の如きも常に悲嘆し玉ひけるは特り教内の理に暗か
 らざるのみに非ず教外の心宗願を探る先達なき故に索
 短ふして深泉を汲まず翼さ短ふして長空に翔らざる心
 地なりと諭置れける由教外の心宗とは何をか云や此見
 性の法門に非ずや至人の一言毫釐も欺き玉はず寔に恐
 るべく敬しつべし神祇冥道も恭敬し尊重し玉ひける程

の止ごとなき上人だにも斯望み深くをばせし見性の大
 事なるものを今の人々の慢り謗り玉ふは罪深くこそ覺
 ゆれ蓋し理はり知り玉はぬ上へには左ばかり罪み科に
 もならぬにこそ惠心院の僧都の如きは廿四歳にして自
 性の大圓鏡を琢磨せんとして横川に入り玉ひしより晝三
 部の法華經夜六萬聲の念佛中間片時も怠惰し玉はず行
 年六十四歳にして初めて自身眞如なる事を識得すとの
 玉ひけるよし寔に貴ぶべし自身纒に眞如なる時山河大
 地萬像森羅草木國土有情非情同時に不變眞如の全體と
 現出す是を寂滅現前見性了悟の時節とす高野の明遍僧
 都五十餘歳の秋深く念佛三昧に入り玉ふ時高野大師正
 しく藕絲の袈裟并に一紙の金文を授け玉ふ其略に曰く

西方の一方を指す者は方便なり九域を簡して亂心を止む畢命を期として名を稱せば心眼即開の大益を得んと心眼即開直に是見性の時節なり大凡世尊一代五千餘卷の金文有つて頓漸秘密不定の妙義を説き演べ玉ひたれども畢竟此の見性の大事を出ず故へに經に曰く唯此一事實餘二即非真と去る程に三世古今の間に見性せざるの佛祖なく見性せざるの賢聖は必定決定無き事なり山野七八歳より心を佛理に傾け十五歳の時出家十九歳にして行脚廿四歳にして初めて此の見性の大事に擯著す其後叢林を経普ねく諸善知識の門闥に跨がり博く諸經論を窺がひ略三教の經典を探り及び諸子百家をさへに若し一法の自性の法門に超過せる有らば莊老列の道と

いへども必らず信受し推し弘めんと誓ひ侍りき今年六十五歳に到つて終ひに見性の大事に過たる法理を見ず左も侍らずは何しに妄りに紙墨を費やして覺へも無き事を書付け高覽に入れ侍るべきや只返す返すも見性の助けに便りよく侍へらば絶へずりも無く唱へ進みて一心不亂の田地に到り玉はば必定大歡喜の眉を開き玉ふべし若しそれ無の字を打捨て佛名を唱る事は專唱稱名の力らに依て見性分明に直に佛祖の骨髓に徹底する事を得ば是可なり縦ひ見性明白なる事を得ずとも稱名の功力に依て死後には必らず極樂に往生せん是一舉兩得萬全の良策なりとの底意ならば早速稱名の修行を放下し純一に無の字を擧揚し玉ふべし何が故ぞ斯れは是二

百年來禪苑を荒廢し眞風を蠹害するの惡風俗杜撰の禪徒鄙俗下賤の邪見解なり夫れ禪宗は抓危が上へにも轉孤危ならん事を要し祖庭は嶮峻が上にも轉嶮峻なるを貴しとす常に要津を把定して凡聖を通せず一言を出す則ば三賢魂蕩し四果眼眩す一句を吐く則ば閑神恐れ走り野鬼悲しみ哭す木人の腸たを割き石女の髓を敲く棟梁の質あつて神俊の才を具する底の英伶の學者を見る則んば難透難解難信難入底の話頭を放つて正法眼藏を瞎却し涅槃妙心を攪奪す學者も亦蠱毒の郷を過るが如く水も亦他の一滴をうけず豎に咬み横に參じて情量の窟宅を破り智解の窠臼を抜き理盡き詞は窮まり心死し意消して忽然として凡に非ず聖にあらず佛にあらず魔

に非ざる底の奇怪の鈍瞎漢を放出して以て佛祖の深恩を報答す斯の如き的手段を法窟の爪牙と名け奪命の神符と云ふ大ひに上々根機の人に利あり中下の機は闍ひて顧みず淨家は却つて是に反す是れ又敬しつべきの一門なり無量壽尊大慈善巧の專修にして六八の大誓に本づき三四の修心を具す専ら中下の機の爲めに設けて無智昏愚の衆生を利し十惡五逆の罪累を抜く攝取不捨の金言を主として下きが上にも轉下きを要とし易きが上にも轉易きを貴しとす此故に言縦ひ一代の教を能く能く學したりとも一文不知の愚鈍の身になして只一向に念佛せよと澆季末代五濁亂滿の邊土に一日も缺くべからざる善巧なり禪門は力士の長けを闘はしむるに等し

高きを以て勝れりとする浄家は侏儒の長けを圖はしむるが如し矮きを以て勝れりとする禪門の高きを悪んで是を廢せば佛心上の眞風は土を拂つて泯没せん浄家の矮きを嫌つて是を廢せば昏愚無智の部屬は惡趣を出る事能はじ願ふにそれ佛は大醫王の如し八萬四千種の方劑を設けて八萬四千種の病根を抜く禪と云ひ教と云ひ律と云ひ淨と云ふ各々是病に應ずる一方なり譬へば世に士と云ひ農と云ひ工と云ひ商と云ふ此四民あるが如し士は智仁兼備へ韜略並べ全ふして王位を鎮護し逆徒を從がへ天下を泰山の安きに置き君を堯舜の君にし民を堯舜の民にし嗔らざれども民斧鉞よりも畏尤も嚴重なるを貴しとす重んずべきの美器なり商は大店を張り貨

財を通じ錦繡綾羅絹帛綿布及び粟米蔗果魚肉をさへに廣きを以て好とす緇素男女老幼尊卑其求めに應せずと云ふ事なし士若し商賈の廣きを羨み財利を貪り行ひて商賈の態を作さば大ひに射御を廢し武藝も亦忘れて笑を朋友に惹ん主人も亦大ひに嗔つて此れを擯出せん商も又士の嚴重なるを羨み劍を帶し鞍馬に跨つて戎面して亂りに西東に走らば人それ大ひに笑はん家道も亦廢せん向に謂ゆる禪を得ずんば命終の時淨土に生せんと兩端に涉つて修行せん人は魚も得ず熊の掌も亦得ず却て生死の業根に培かい命根截斷因地一下の歡喜は努々是有べからず無の字と名號と兩般なしと申す中に得力の遲速見道の淺深に到つては少しき子細無きにしもあ

遠羅天釜

らず大凡辨道參玄の上士情念の滲漏を塞斷し無明の眼
 膜を觸破するに到つては無の字に越へたる事は侍るべ
 からず去程に五祖の演禪師の頌に趙州の露及劍寒霜光
 爛々更擬問如何分身作兩段總じて參學は疑團の疑結を
 以て至要とす此故に道大疑の下に大悟あり疑がひ十分
 あれば悟り十分有りと又佛果和尚の曰く話頭を疑がは
 ざるを大病とすと參玄の人纒かに大疑現前する事を得
 ば百人が百人千人が千人ながら打發せざるは是有るべ
 からず若し人大疑現前する時只四面空蕩々地虛豁々地
 にして生にあらず死に非ず萬里の層氷裏にあるが如く
 瑠璃瓶裏に坐するに似て分外に清涼に分外に皎潔なり
 癡々呆々坐して起事を忘れ起て坐する事を忘る胸中一

遠羅天釜

點の情念無ふして只一箇の無の字のみ有り恰かも長空
 に立つが如し此の時恐怖を生せず了智を添へず一氣に
 進んで退かざる則んは忽然として氷盤を擲摧するが如
 く玉樓を推倒するに似て四十年來未だ曾て見ず未だ曾
 て聞ざる底の大歡喜あらん此時に當つて生死涅槃猶如
 昨夢三千世界海中の漚一切の賢聖電拂の如し是を大徹
 妙悟因地下の時節と云ふ傳ふる事得ず説く事得ず恰
 かも水を飲で冷暖自知するが如けん十方を目前に銷融
 し三世を一念子に貫通す人間天上の間那箇の歡喜かこ
 れに如ん是等の得力は學者親切に進まば纒かに三日五
 日の功にして必ず得ん如何が大疑現前する事を得んと
 ならば靜處を好まず動處を捨てず我が此臍輪氣海總に

遠羅天釜

是趙州の無無の字何の道理か有ると一切の情念思想を
 抛下し單々に參窮せんに大疑現前せざる底は半箇も亦
 無けん如上の大疑現前純一無雜の體裁を聞き及ばれて
 は怪しく恐ろしく氣味わろき事に思し召さるべけれど
 も無量劫來生死の重關を踏破し十方の如來本覺の内證
 に徹底する程の目出度き大事なるものを左ばかりの艱
 辛はあらではあるべきと覺悟是あるべし熟願ふに無の
 字を參究して大疑現前し大死一番して大歡喜を得る底
 は數限りも無く是あり名號を唱へて少分の力らを得る
 底は兩三箇ならでは聞き及ばずなん侍り惠心院の僧都
 も智徳と云ひ信心力と云ひ無の字か麻三斤の話など參
 究し玉びたらんには自身真如なる程の事は一月二月乃

遠羅天釜

至一年半年程の中には發明し玉ふべきものを名號誦經
 の功によりて四十年の精彩を盡し玉ひたるなるべし是
 唯疑團のをはするをばせざるに依れり須らく知る
 べし疑團は道に進む羽翼なる事を法然上人の如き道徳
 仁義精進勇猛暗中に聖教を披覽し玉ふに眼の光りを用
 ひ玉ひける程なれば少し疑團だに在したらんには立地
 に大事了畢し往生決定し玉ふべきものを豈に索短ふし
 て深泉を汲まざるなご悲歎し玉ふに及ばんや去る程に
 楊岐黃龍眞淨息耕佛鑑妙喜の諸老をさへに大凡百千億
 の諸佛名あり百千億の諸神咒あり授與すべく舉揚すべ
 き法門は不足も無き中に特に此無の字を興へて舉揚せ
 しむ豈に長處なからんや願ふに無の字は疑團起り易く

遠 羅 天 釜

名號は疑團起り難き故なるべし然るに禪門に於て專唱
 稱名往生を希望する事は古へ禪苑凋枯せず真風未だ地
 に墜ざりし日は一向に無き事也西天の四七唐土の二三
 傳燈歷代の祖師南嶽青原馬祖石頭百丈黃檗南泉長沙臨
 濟興化南院風穴首山汾陽慈明黃龍真淨晦堂息耕妙喜及
 び五家七宗の諸老をさへに梁陳隋唐宋元の間六朝の大
 宗匠各々孤危の宗風を立して臂に奪命の神符を繫け口
 に法窟の爪牙を咬鳴して只宗風の地に墜ん事を恐れて
 晝夜に願輪に答つて屹々として怠る事無し破口にも往
 生淨土の事を論せず悲哉時乎命乎大雅枯て桑間湧き古
 曲啞して鄭衛震ふ流へて大明の末に至つて雲棲の殊宏
 なる者あり參玄力ら足らず見道眼暗ふして進むに寂滅

遠 羅 天 釜

の樂みなく退くに生死の恐れあり悲嘆押さへ難く終に
 遠公蓮社の遺韻を慕つて祖庭孤危の眞修を捨て自ら蓮
 池大師と稱して彌陀經の疏鈔を造り大ひに主張して後
 學を引く鼓山の元賢永覺大師淨慈要語造つて擊節して
 輔佐く此に於て漢土に普く扶桑に溢れて終に救ふ事
 無きに至る假令今の世に當つて臨濟德山汾陽慈明黃龍
 眞淨息耕妙喜の諸老臂を褰げ齒を切ばり手に唾さして
 攘斥すと云とも此狂瀾を廻す事能はじ是全く淨業の宗
 旨を狭し專唱の修行を輕賤するに非ず禪門に在りなが
 ら禪定を修せず參禪に懶く志行懶惰にして見性眼昏く
 禪學力ら乏しふして茫々として一生を過ぎ了つて命日
 崦嵫に逼るに及んで來生永劫の苦輪を恐れ俄かに欣求

淨土の行課を勤め在家無智の男女に對しいかめしげに
 長念珠かい爪ぐり高か念佛しながら末代下根の我れ等
 に似合たる厭離穢土の專修に超へたる事は侍らぬぞ豊
 など頭べ禿ろに齒疎なるが動もすれば殊勝げに打泣き
 打泣き目をしば扣きて口説立たるは實々しけれども從
 前曾て勤めざる禪定何の利益か有ん從前曾て修せざる
 禪學何の靈驗か有らんこれ等の族は禪門に在りながら
 禪門を誘倒す蠹啄の虫の梁柱より生して却て梁柱を割
 くが如し點檢せずんば有るべからず壯年の懶惰懈怠は
 却つて老來の憂惱悲歎となんぬ老來の憂惱悲歎は責る
 に足らず既に往じをば咎めじ壯年の懶惰懈怠は各々宜
 しく恐れずんばあるべからず大明以來此黨甚はだ多し

盡く是庸才懦弱の禪徒なり三十年前去る老宿の悲嘆せ
 られけるは嗟衰へたる哉向後三百年を過ぎば天下の禪
 苑盡く總盤を張り木鐘を居へ六時禮讚四隣を驚かすに
 至らんと云て落涙せられける由し寔に恐るべし老僧最
 後親切の一着あり眉毛を惜まず殿下の爲に擧揚し去ら
 ん一喝の會を作す事なかれ陀羅尼の會を作す事なかれ
 況や崑崙に聚を吞玉はんをや作麼生が是親切の一句僧
 趙州に問ふ狗子に還つて佛性有りや否や州曰無 穴賢

答 客 難

元明禪家流徃徃偏稱佛此混武夫於明月雜燕石於隋侯也
爾來天下叢林擊節相從滔滔乎繼踵宗風陵夷職是之由當
此之時非假無畏一聲無由令多少頑皮粗頭腦裂破向也鍋
嶼侯馳書致之問師叩兩端而竭焉可謂視針於霧海還珠於
合浦者也一日有客謂予曰淨土一門如來勝方便也馬鳴稱
之龍樹慕之勝妙國土似實有之然今卻之其他劣機聞之則
必斷望淨土予曰噫如事淨土如來不可思議莊嚴海中非無
此事只是鏡像幻化而已矣雖然識破幻化之所以為幻化則
無幻化之可為幻化也但以法身幽微法體難緣且教念佛觀
形以禮讚是無他愚凡障重故也若夫大心衆生那處不是淨

土願子之所執者莊嚴有餘等也師之所示者寂光理土也宜哉子之生疑也佛華嚴經曰如來淨土或在如來寶冠或在耳瑤或在瓔珞或在衣紋或在毛孔如此毛孔既容世界故的知無方處無涯畔焉蓋如二尊者悲願廣大為物前驅謂之權著幻化衣願生幻化國乎謂之不起此土之本土而現無生之往生乎要之如來出世本懷祖師應機作用其跡萬端其致一也但欲令一切衆生悟入佛知見也更無餘蘊法華經曰諸佛世尊種種方便種種譬喻種種因緣是法皆為一佛乘故為諸衆生演說諸法如是則淨土之設豈非為一佛乘之助耶吾老師如上丁寧告誡豈有他哉卻其莊飾呈之本色譬如真金止啼苟為黃葉他後有悔又為元明之間屈辱宗旨者有所激切則是屋裏鳴鼓之攻也豈敢教驅他信男信女願生之人而粧

重自家底者哉有人專修稱名忽然發得三昧則不期然而必然是佛道無二故也子其好思歷然可解客曰淨土幻化何物不幻化禪亦幻化與夫如佛者積萬善於曠劫蕩無始遺塵以果報故獲其土清淨不可謂之幻化也借如譏禪門為其所短讚於如來則必有所長予曰果報之士實是幻化也蓋嘗論之大毘盧舍那五智圓明常住本體猶如清淨摩尼寶珠而能現種種色像淨則淨現穢則穢現總是所現物也無現而現故非無雖現不現又非有有既無何據不思議之所致不能容有無於其間而何物不現所以萬有森然弗知其所以來一虛蕭然罔識其所以往以色像能依故離寶珠無色像以寶珠所現故離色像無寶珠寶珠即色像色像即寶珠有人實體如此大寶珠則能現不可說微塵數淨土無不包羅無不含蓄唯

是當處湛然與彼繫念一佛國土者奚翅霄壤哉是故至人無往而不寶珠光光映徹主伴無盡愚凡反之是故無往而不色像法法質礙淨穢駁雜是由他契證與否耳如淨土為中下根假緣微妙色像而感無依珠體者也故以希望為之媒得見色像斯可寶珠不可得見也如禪家為上上機直指圓明寶珠不見有依色相者也故以妙悟為之則寶珠亦擊碎何色像之有蓋禪與淨土途軌殊禪者傳佛心印荷擔正法眼藏者也佛心即禪更有何佛正法即是宗更有何經所以調御師付金襴於大龜氏燈燈相續血脉不斷猶瓶水相承實為法中之王譬之世之帝者天之曆數杜爾躬乃能以天下為己任叡哲欽明遊及萬機理無不統威無不伏是故天下有主則上下位焉萬物安焉若一日失其主則天下壞亂莫甚於此大矣哉為主也民

無得而遁焉如事淨土者攝取不捨於計我著相之族巧善逗根機蓋溫和法門也自其珠體言之則非幻化而何也是故圓覺經曰不可說恒河沙諸佛世界猶如空華亂起亂滅當知一切世界皆如幻而住是以實教所明僉以無形為淨土華嚴曰依真而往非國土生公亦曰佛有形累託土以居佛是常住法身何須國土當知十方諸佛所有國土悉是幻化而非真實也由是觀之佛道必不在於茲彰然矣不知者自謂禪而兼淨土虎而挾翼者也或謂禪而無淨土十人九蹉路然則如彼韓墨楊申之徒謂令帝者習於國人之業乎匪啻不能有其祚必至亡其國焉苟憂其道之不明惟在痛勵密進自全其德而已奚以兼為華嚴觀云有信不信法界信是邪凡諸經論中具明二行一者無念二者有念而雖皆可成佛道優劣懸殊參禪辨道

即無念無相念佛此謂真如三昧也欣求淨土即存想計名念佛此謂修習淨業但能通達不二便為真佛子矣想道夫兼之者蓋二本故也觀經云諸佛如來法界身是心即是三十二相八十隨形好是心作佛是心是佛又曰佛身高六十萬億那由多恒河沙由旬彼佛圓光如百億三千大千世界如來誠諦之語到此顯示內燈其旨甚深名之曰恢廓廣大超勝獨妙建立常然無衰無變之妙土如此妙土不可以形相莊嚴也不可以金珠修飾也所以金剛般若曰若菩薩作是言我當莊嚴佛土是不名菩薩何以故如來說莊嚴佛土者即非莊嚴是名莊嚴又維摩經曰隨其心淨則佛土淨果如此則參禪學道豈非是莊嚴佛土耶彼元明禪者欲自刷其造詣之不精故傳會以文之甚者不過耶耶之步也陽為慕之陰與悖之又何取也世之

學佛者狐疑莫之能正雷同換難於易則如來正法眼藏復幾乎息矣可不思哉吾師關之廓如豈好辯哉不得已也客曰幻化法門我復何望若子所言則畫焉者歟予曰不然三乘所趣法體無異但心有大小故為差耳夫以幻幻於幻則所幻而可幻以幻幻非幻故雖幻而非幻是故涅槃經曰善男子或有是色或非是色言非色者即是聲聞緣覺解脫言是色者即是諸佛如來解脫善男子是故解脫亦色亦非色菩薩從上來設度門於谷響修萬行於空華前所謂種種色像即是清淨寶珠而事理不二者也雖然若不識破幻化則幻化上頭復逐幻化遂為其所魅著抵死不能脫也是吾老師所以為我門味寶珠者而痛卻之也豈復撥無幻化而證真實者哉龍樹大士曰寧可起有見如須彌山不可起空見如芥子許如寡聞比丘受持方

等千部生得陷墜當知除幻化而無佛陀離幻化而無教乘儻滅熅如幻之神力而焦敗下化之佛種縱令得成正覺是咸為顛倒二乘與佛道迥而殊矣如諸佛妙用感則必有應所應復為感所感復有應則無不憑此如幻力猶如為國者以救凡民為本也是名為億兆君子當知幻化是佛界之大寶聚幻化是法門之大柱礎菩薩之種子也諸佛之本命也然現之與卻之未嘗無妙處也唯自從寶珠體得上而受用將來自從幻化識破上而與奪將去者也豈亦容易哉豈亦容易哉若夫胡亂禪者輕慢白衣道之不學教之不明大言放語效師之響未免誹謗如來希有威儀孤負老師血滴親言吾子其思之客唯唯而退便作答客難

寬延四辛未歲林鐘日

參學某甲拜識

遠羅天釜跋

先佛遺言赫乎三藏存焉乃祖立旨炳然五燈傳焉蓋自利利他自不能不然也於戲如此書明辨觀縷不墜先規可謂未聞之聞也讚之則大虛生翳謗之則巨海起漚余亦何言其或附諸炬或上諸紙其跡雖異其道一也何則法門威儀唯此是勤向近驛二三白衣語余曰頃聞師有示徒之長書我曹觀覽無便且有嫌乎謄寫冀戮力鏡諸梓以令住菴精修之諸子免

跋
二
吮墨之勞余曰善哉如有政雖不吾用吾其與
聞之於是乎跋焉寬延己巳仲春參學小比丘
慧梁焚香稽首書于芙蓉峰下

明治四十二年八月十六日印刷
明治四十二年八月二十日發行

公民文庫奧付第十冊

正價拾八錢

編輯者

東京市京橋區彌左衛門町七番地

共同出版株式會社編輯局

發行者

東京市京橋區彌左衛門町七番地

共同出版株式會社

右代表者

赤坂龜次郎

東京市赤坂區田町五丁目十一番地

印刷者

齋

藤

裕

不許複製

216
800

公民文庫

每册正價金拾八錢

第一册 古文眞寶前集

慶應義塾大學講師栗林勝太郎君校訂

中村正直譯

第二册 西國立志編上卷

江島其碩著

第三册 商人軍配記

出世
早合點
共同出版株式會社編輯局編

第四册 蜀山狂歌集

菖水辻澤玄君校訂

第五册 唐詩選 (假名付)

慶應義塾大學講師栗林勝太郎君校訂

第六册 古文眞寶後集

第七册 奧細道管菰抄

養笠庵梨二選

附芭蕉句撰

第八册 西國立志編下卷

中村正直譯

第九册 川角太閣記上卷

白隱禪師

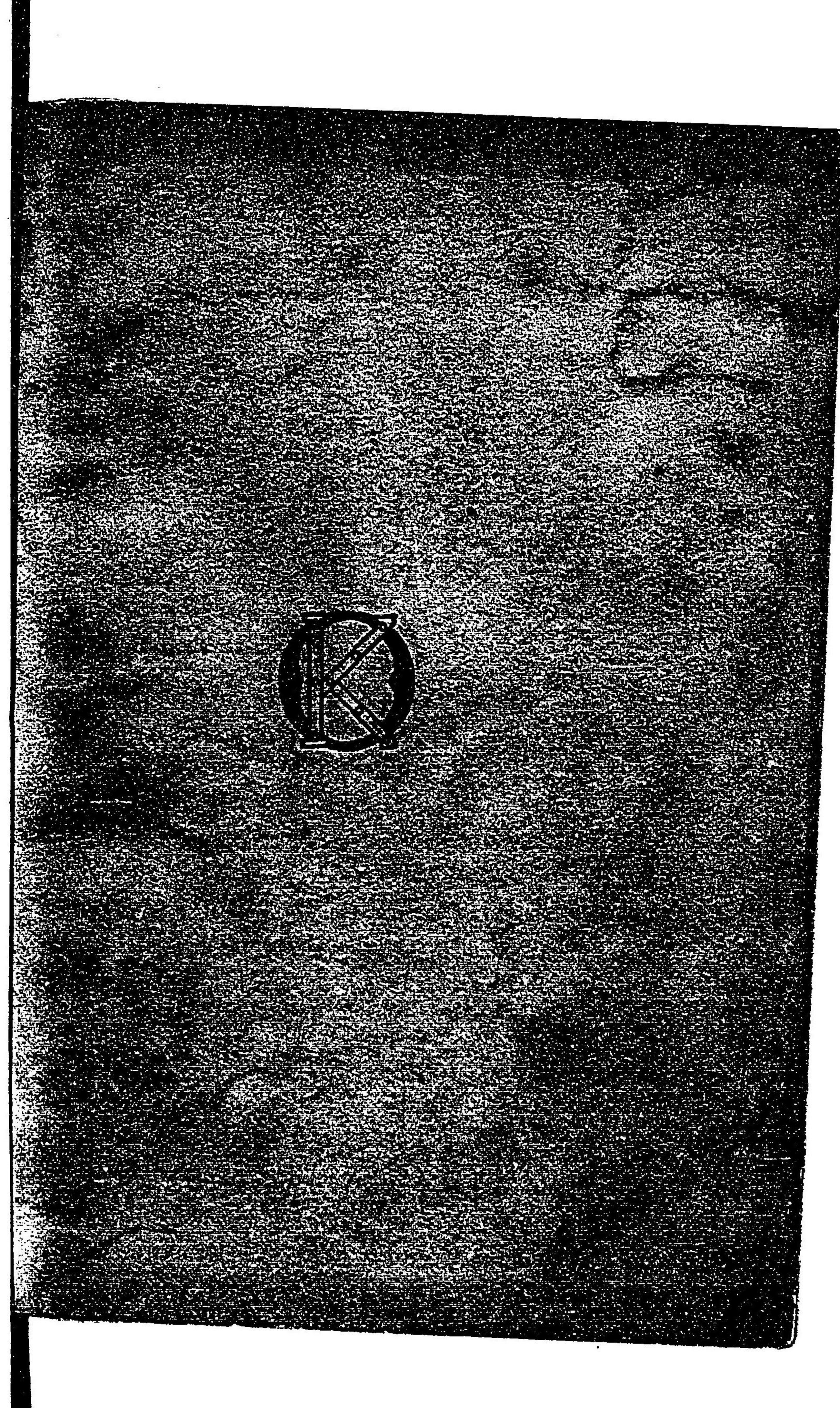
第十册 遠羅天釜

第十一册 川角太閣記下卷

大納言公任選

第十二册 和漢朗詠集

以下續出



019372-000-0

特65-285

遠羅天釜

白隱禪師／著

M42.8

ABG-0064

